

一般国道253号  
上越三和道路関係発掘調査報告書V

屋敷割付遺跡

2008

新潟県教育委員会  
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道253号  
上越三和道路関係発掘調査報告書V

や し き わ り つ け  
屋 敷 割 付 遺 跡

2 0 0 8

新潟県教育委員会  
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

## 序

上越三和道路は、上越市と上越市三和区（旧三和村）を結ぶ地域高規格道路（自動車専用道路）で、上越市から南魚沼市に至る延長約60kmの一般国道253号上越魚沼地域振興快速道路の一部です。この地域高規格道路は、地域の活性化と他地域との交流を促進することを目的として建設される道路です。上越地域においては、高規格幹線道路である北陸自動車道と併せ、信頼度の高い循環型ネットワークの形成を目指し、経済・文化の交流と発展が促進されるものと期待されています。

本書は、この上越三和道路の建設に先立ち、平成18年度に実施した屋敷削付遺跡の発掘調査報告書です。調査によって、平安時代の多くの遺物と共に、人為的に埋め戻された性格不明の土坑16基が検出されました。これらの遺構が自然流路を挟んだ2つの地区で群をなすことや、掘立柱建物などの居住域を伴わないことから、屋敷削付遺跡は集落とは異なる性格をもつ遺跡と考えられます。

今回の調査成果が、地域の歴史を解明するための研究資料として広く活用されるとともに、県民の方々の埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大なご協力とご援助をいただいた上越市教育委員会、ならびに地元住民の方々、また発掘調査から報告書刊行に至るまで格別のご高配をいただいた国土交通省北陸地方整備局高田河川国道事務所に対して厚く御礼申し上げます。

平成20年3月

新潟県教育委員会

教育長 武藤 克己

## 例　　言

- 1 本書は、新潟県上越市大字戸野目古新田字屋敷割付ほかに所在する屋敷割付遺跡の発掘調査記録である。
- 2 この調査は、一般国道253号上越三和道路の建設に伴い、国土交通省から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したもので、調査主体である県教委は財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に依頼した。
- 3 埋文事業団は掘削作業等を株式会社みくに考古学研究所に委託して発掘調査を実施した。
- 4 出土遺物および調査・整理作業に係る各種資料は、一括して県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。遺物の注記は、屋敷割付遺跡の略記号「06ヤシキ」とし、出土地点や層位を続けて記した。
- 5 本書の図中で示す方位は、すべて真北である。
- 6 遺構番号は種別に問わずに通し番号とし、本文および挿図・観察表・図面図版・写真図版の番号は一致している。
- 7 引用文献は、著者および発行年（西暦）を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
- 8 火山灰の同定について（第VI章2）は、ト部厚志氏（新潟大学災害復興科学センター）から玉稿を賜った。
- 9 自然科学分析に係る各種の同定（第VI章1）は、株式会社パリノ・サーヴェイに委託して実施した。
- 10 遺構図のトレースおよび各種図版作成・編集に関しては、株式会社セビアスに委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。また遺物写真撮影はデジタルカメラ（ニコンD100）で撮影し、遺構写真同様デジタル化して編集を行った。
- 11 本書の執筆は、渡邊裕之（埋文事業団調査課長）、入江清次（同主任調査員）がこれにあたり、編集は渡邊が担当した。執筆分担は以下のとおりである。  
第I・II・III章…入江、上記以外…渡邊  
なお、近世陶器については相羽重徳氏（株式会社古田組 埋文調査部）からご教示を得た。
- 12 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々および機関から多くのご教示・ご協力をいただいた。ここに記して厚く御礼申し上げる（敬称略　五十音順）。  
金子拓男　小島幸雄　菅澤正史  
国土交通省北陸地方整備局高田河川国道事務所　上越市教育委員会

# 目 次

## 第Ⅰ章 序 説

1 調査に至る経緯	1
2 調査と整理作業	1
A 試掘確認作業	1
B 本発掘調査	2
C 調査・整理の体制	3

## 第Ⅱ章 遺跡の環境

1 地理的環境	4
2 歴史的環境	6

## 第Ⅲ章 調査の概要

1 グリッドの設定	10
2 基本層序	10

## 第Ⅳ章 遺構

1 概要	13
2 人為的埋土土坑	14
3 土坑・ピット	15
4 溝	16
5 自然流路	16
6 井戸	17

## 第Ⅴ章 遺物

1 概要	18
2 平安時代の土器	18
A 器種分類	19
B 遺構出土遺物	20
C 包含層出土遺物	23
3 その他の遺物	23
A 縄文土器	23
B 近世陶器	23
C 石器	23
D 木製品	24

## 第VI章 自然科学分析

1 古環境及び遺構の用途	25
A はじめに	25
B 試料	25
1) 土壌試料	25
3) 木製品	26
C 分析方法	26
1) 花粉分析	26
3) 樹種同定	27
D 結果	27
1) 花粉分析	27
2) 種実遺体分析	28
① 遺構別の種実検出状況	28
② 種実の記載	29
3) 樹種同定	31
4) 考察	31
① 古植生	31
② 遺構の用途	32
③ 木材利用	32
2 平安時代の流路跡に見られる火山灰	35

## 第VII章まとめ

1 屋敷割付遺跡と周辺の遺跡	36
A 遺跡の立地と旧地形	36
B 洪水堆積層の検出から派生する問題	36
C 遺跡の動態と地形変化	38
2 人為的埋土土坑	38
A 屋敷割付遺跡と上浦遺跡	38
B 屋敷割付遺跡と越前遺跡	40
C 人為的埋土土坑の機能	40
『要約』	43
『引用・参考文献』	44
『観察表』	46

## 挿図目次

第1図	試掘調査トレーンチ位置図	2	第10図	器種分類図	19
第2図	高田平野の地形と遺跡の立地	5	第11図	SX17（遺物集中区）検出状況	22
第3図	遺跡の位置と周辺の遺跡	7	第12図	分析資料及び試料採取位置	25
第4図	ハ幡地遺跡探集資料	9	第13図	各遺構の花粉化石群集	28
第5図	グリッド設定図及び土解柱状図	11	第14図	平安時代の流路の模式図と試料採取位置	35
第6図	土坑計測位置	14	第15図	9.13水害浸水域と遺跡の分布	37
第7図	人為的埋土土坑（SX）の規模	14	第16図	上浦遺跡における人為的埋土土坑の分布	39
第8図	人為的埋土土坑（SX）の主軸方位分布	15	第17図	越前遺跡遺構配置図	40
第9図	土器重量分布	18	第18図	岩野E遺跡の人為的埋土土坑	41

## 挿表目次

第1表	周辺の遺跡	6	第4表	花粉分析結果	27
第2表	遺構観察表	13	第5表	種実分析結果	28
第3表	SX17出土土器器種構成比率	21	第6表	樹種同定結果	31

## 図版目次

図版1	遺構全体配置図
図版2	遺構分割図
図版3	遺構個別図1 SD1・2、P5、SX22・28・29・32
図版4	遺構個別図2 SX20・18・23・30・31・33・34
図版5	遺構個別図3 SX12・13・19・27、P25
図版6	遺構個別図4 SK21、SD111、SE110
図版7	古代の遺物（1）SX12、SK21、SD1、SX19
図版8	古代の遺物（2）SX17
図版9	古代の遺物（3）SX17、縄文時代の遺物
図版10	古代の遺物（4）遺物包含層
図版11	古代の遺物（5）遺物包含層、17世紀の遺物
図版12	遺跡近景、基本層序、人為的埋土土坑
図版13	基本層序、SD1・2・3、SK21
図版14	SX12・13・17・18
図版15	SX19・20・22・23、作業風景
図版16	SX24・27・28・29
図版17	SX30・31・32・33、P5・25、完掘状況
図版18	東区調査状況、SE110、SD111
図版19	古代の遺物（1）
図版20	古代の遺物（2）
図版21	古代の遺物（3）
図版22	古代の遺物（4）、17世紀の遺物

# 第Ⅰ章 序 説

## 1 調査に至る経緯

上越三和道路は、上越魚沼地域振興快速道路（一般国道253号）の一部区間を構成する上越市寺から上越市三和区（旧三和村）本郷に至る延長約7.4km区間を指す。上越地方拠点都市の連携強化を図り、地域の活性化を促進することを目的として計画され、平成10（1998）年12月に整備区間として国土交通省の指定を受けた。また、上越魚沼地域振興快速道路（一般国道253号）は、現国道253号の南側をほぼ並行して走り、上越市と南魚沼市（旧六日町）を結ぶ延長約60kmの自動車専用の地域高規格道路として計画され、完成すれば上越地方と首都圏を結ぶ最短経路として広域的な交流が促進されることが期待されている。

国交省は、上新バイパスにつながる上越三和道路の着工に向けて、県教委に計画予定地内における埋蔵文化財の分布調査を平成14年3月29日に依頼した。調査の結果、中世以前の遺物が採取されたのは19か所であったが、当該地が沖積平野であり、多くの遺跡が地中に埋没している可能性が想定されることから、計画法線のほぼ全域にわたって試掘確認調査を行い、その後に取り扱いを判断する必要があるとした。

平成16年度、県教委は国交省の委託を受け、埋文事業團に72,060m<sup>2</sup>を対象とする試掘確認調査を委託し、埋文事業團は平成16年4月～11月にかけて調査を実施した。屋敷割付遺跡周辺では、平成16年10月に23,100m<sup>2</sup>を対象として調査を実施し、その結果、遺構・遺物を検出した7,300m<sup>2</sup>について本発掘調査が必要と判断し、小字名から屋敷割付遺跡と命名した。一方、本調査が必要と判断した範囲に挟まれて存在する未買収地5,330m<sup>2</sup>については、用地買取後に追加調査を行ったうえで本発掘調査の要否を判断するとした。

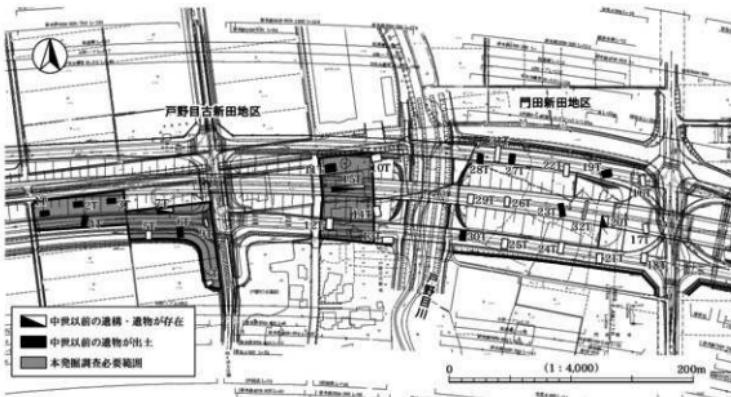
## 2 調査と整理作業

### A 試掘確認調査

試掘確認調査は平成16年10月18日～28日、11月24日～26日の2回にわたり実施した。便宜上、戸野目川を境に調査対象範囲を2地区に分け、戸野目川左岸を戸野目古新田地区、右岸を門田新田地区と呼称した（第1図）。両地区合わせて23,100m<sup>2</sup>に32か所トレーンチを任意に設定し、重機及び人力による掘削・精査を行って遺構・遺物の有無を確認した。また土層堆積状況等を記録した。

戸野目古新田地区では1～15トレーンチの15か所を設定し、7・11・15トレーンチで遺構が確認された。7トレーンチでは溝2条と土坑、11トレーンチでは土坑と複数のビット、15トレーンチでは井戸の可能性がある土坑とビットを検出した。また、4トレーンチでは旧流路と思われる幅6mの落ち込みが確認され、川底から土師器が出土していることから中世以前の流路と判断した。遺物は1～4・6・7・15トレーンチに限られ、いずれも平均層厚18cmの包含層より出土した。このうち7トレーンチでは残存率が高いものを中心に須恵器が9点出土した。これらのことから遺構を検出し、遺物が比較的多く出土した7,300m<sup>2</sup>について本発掘調査が必要であると判断した。なお、本調査必要範囲の中に入れ子状に含まれる未買収地については、用地買取後に改めて確認調査を行い、本発掘調査の要否を判断するとした。

一方、門田新田地区では16～32トレンチの27か所を設定し、20トレンチから土坑の可能性がある落ち込みを検出したが、積極的に遺構と判断できる根柢を見出しができなかった。以上の結果、一定量の遺構・遺物を検出したものの全体的に希薄であり、また、これ以上の調査期間を確保することが困難であったため、遺構・遺物が検出された地点を中心 $10,320\text{m}^2$ について判断保留とした。未買収地が $1,000\text{m}^2$ 残されていることから、今後、追加調査を行ったうえで本発掘調査の要否を決定することとした。



第1図 試掘調査トレンチ位置図

## B 本発掘調査

平成18年4月21日～7月31日にわたって本発掘調査を行った。調査を開始するにあたって、調査対象範囲のはば中央を通る市道を境に、上越市街地寄り（1～15グリッド列）を「西区」、戸野目川寄り（17～31グリッド列）を「東区」と便宜的に呼称することにした。

当初、試掘確認調査の結果を受けて $7,300\text{m}^2$ を調査対象範囲としたが、本調査開始直前になって、未買収地のため本調査範囲から除外した $5,330\text{m}^2$ が平成17年度末にすでに買取されていたことが判明した。国交省からの追加調査の要望をもとに県教委と協議した結果、本調査範囲に挟まれて追加買収地が存在することから、試掘確認調査を行うことなく、そのまま本調査範囲として取り扱うことになった。よって、屋敷削付遺跡の調査対象範囲は $12,630\text{m}^2$ に拡大された。そして面積増加の結果、今年度中の本調査完了が困難となることが予測されたため、平成18年度は西区のみを調査対象とし、東区は平成19年度に調査を行うことで国交省・県教委と合意した。

遺跡周辺の現況は水田耕作地で、調査対象地も国道253号上越三和道路法線内になる以前は水田として利用されてきた。地元住民の話によれば、調査対象地は古くから軟弱な土地として認識され、昭和30年代まで行われていた牛耕では、牛が肩まで埋まって身動きができなくなる事があったという。実際、発掘調査の結果、自然流路SD1両岸のⅢ層からは多数の牛の足跡を確認することができた。以上のような軟弱地盤に対応するため、調査区の周間に暗渠を設営し、周辺からの地下水の浸入防止と強制的な排水を行った。4月12日、西区から暗渠工事を開始した。上述したように、本調査開始直後に調査範囲が増加され、東区については平成19年度調査が予定されていたが、予想以上に軟弱地盤であったことから、平

成18年度中に東区においても暗渠工事だけは終了することとした。しかし、実際に東区で暗渠工事を進めてみると、搅乱が激しく、包含層の有無が疑問視されるに至った。そのため、暗渠工事を東区北側のみで中止して、南側については試掘トレーンチ調査で対応することとした。

5月12日より作業員を投入し、西区西側から包含層掘削を開始した。ホソと竹べらを併用しての作業であったが、粘性がきわめて強い土質であったこともあり作業は難航した。土層・遺構観察と排水施設を兼ねた開渠を大グリッドごと10m間隔で掘削した。開渠による断面観察の結果、西区東側の1部(9~15・C~Dグリッド)を除く多くの地点で遺物が希薄であったため、人力掘削を中断し、重機による包含層掘削に変更した。その結果、西区西側(1~8グリッド列)において、北西から南東の方向に流れる幅4~6mの自然流路が確認された。覆土や深さを見るため幅2m×長さ6mのトレーンチを掘削したが大雨により壁が崩落したため、流路の中央部に幅3m×長さ10m×深さ3mのトレーンチを新たに掘削のうえ、土層観察を行った。一方、遺物が集中して出土した西区東側の中央部分(9~13Cグリッド)は手作業による掘削を行った結果、性格不明遺構を中心とした複数の遺構が検出された。

6月1日から東区の調査を開始した。当初、来年度以降に調査を行う予定であったが、暗渠掘削時の土層観察から遺物が希薄であることが予測されたため、まずは重機によるトレーンチ調査を行った。その結果、搅乱が広範囲に及び、包含層が存在しないことが明らかとなつた。また、試掘確認調査で検出した25~27B~Dグリッドの遺構は、出土遺物等から近世以降であると判断した。

以上の状況により、調査期間は予定より大幅に短縮され、来年度調査予定範囲を含めた12,630m<sup>2</sup>について7月31日に調査を終了し、国交省に引き渡した。また、7月23日には地元住民の方々を対象として出土遺物展示会を実施し、51名の参加者を得た。

整理作業は、現地調査と併行しながら行った。出土した遺物の水洗・注記を現地プレハブで行い、実測図および観察表作成、トレイスなどはみくに考古学研究所にて行った。

## C 調査・整理の体制

### 試掘調査

調査期間	平成16(2004)年10月18日~28日、11月24日~26日
調査主体	新潟県教育委員会(教育長 板尾越鶴一)
調査	財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団(理事長 板尾越鶴一)
總括	黒井 幸一(事務課長)
管理	長谷川二三夫(総務課長)
庶務	高野 正司(総務課主任)
調査統括	藤巻 正信(調査課長)
指導	山本 勘(調査課法脈確認調査担当課長代理)
調査担当	瀬沢 規朗(調査課班長)
職員	片岡 千恵(調査課嘱託員)

### 本発掘調査・整理作業

期間	平成18(2006)年4月24日~7月31日(本発掘調査) 平成18(2006)年9月1日~平成19(2007)年3月31日(整理作業)
調査主体	新潟県教育委員会(教育長 武藤 克己)
調査	財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団(理事長 武藤 克己)
總括	波多 優一(事務局長)
管理	齋藤 実(総務課長)
庶務	長谷川 順(総務課主任)
調査統括	藤巻 正信(調査課長)
指導	寺崎 裕助(調査課担当課長代理)
調査担当	波多 祐之(調査課班長)
職員	入江 清次(調査課主任調査員) 支援組織 株式会社みくに考古学研究所 現場代理人 間 健二 調査員 實田 駿一 桑原 健 補助員 古口由美子 瀬沢由美子 桑原淳子 今成京子 貝瀬あゆみ

## 第Ⅱ章 遺跡の環境

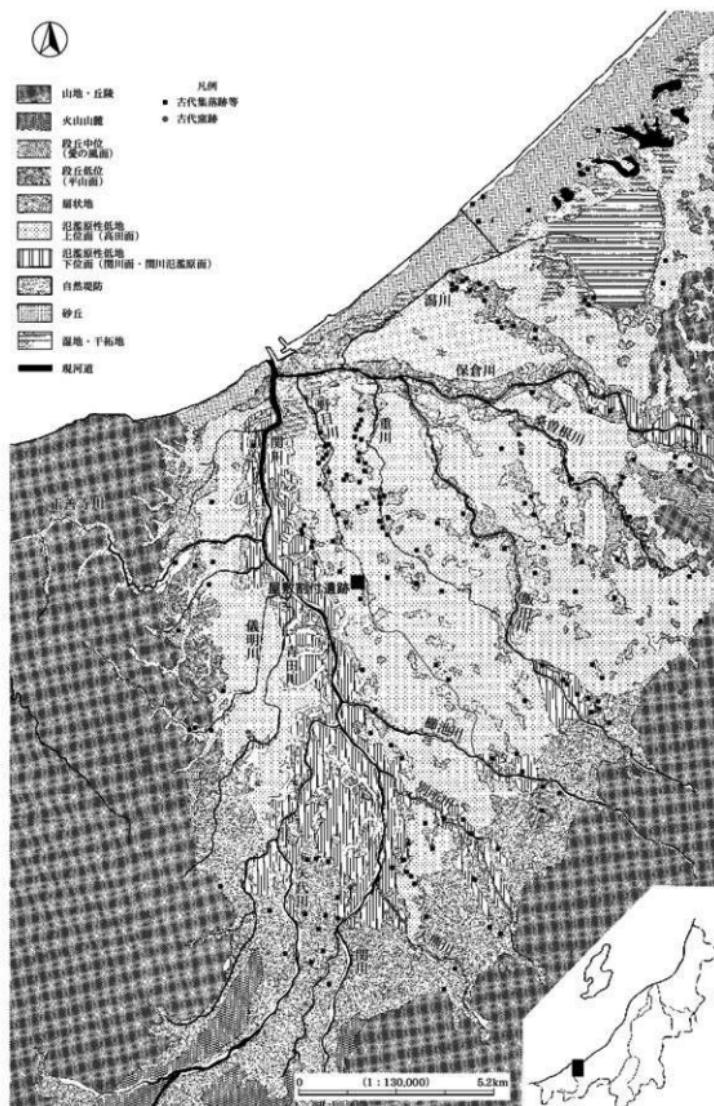
### 1 地理的環境

屋敷削付遺跡が所在する高田平野は、新潟県の南西部に位置する沖積平野である。高田平野周辺の地形を概観すると、平野北部の海岸線には潟町砂丘が長さ約20kmにわたって分布し、海岸線と平野を区分している。潟町砂丘は「古砂丘型砂丘」と呼ばれ、砂層は古砂丘砂層と新砂丘砂層の2層の砂層構造を成す。砂丘の内側には、平野形成の早い時期に砂丘によって日本海と遮断されて形成された潟湖の名残である朝日池・鶴ノ池・天ヶ池・鷺ヶ池などの沼群がみられる。背後には北東から南東にかけて東頸城丘陵が広がり、丘陵北端には米山(993m)を主峰とする米山山地、南東には菱ヶ岳(1,129m)や鍋倉山(1,289m)などからなる関田山脈が信越国境をなす。また平野西側には西頸城丘陵が広がる。西頸城丘陵南方には西頸城山地が連なり、その北端には青田難波山(949m)、南端には主峰の火打山(2,462m)がそびえている。さらに南には焼山(2,400m)および妙高山(2,454m)の両火山がそびえ、平野南端は、妙高山の岩屑流、火砕流によって形成された丘陵と接している。

これら周辺の山々や丘陵から多数の河川が流入している。平野中央部から西部にかけて火打山・妙高山および長野県境に源流をもつ関川が平野を北流し、河口の直江津で日本海に注いでいる。途中、妙高山から大田切川、西頸城山地・丘陵から矢代川・儀明川などが、また、東頸城丘陵や関田山脈からは大熊川・柳池川・飯田川・保倉川などの中小河川が関川に合流する。平野の北東部では米山山地・東頸城丘陵を源流とする柿崎川・大出口川・吉川などが流れ、柿崎で日本海に注いでいる。

高田平野は、沖積面が段丘化して高田面と関川面の2面の段丘面を形成し、現在の関川流域はまさに一段下位に位置する。このような現象は新潟平野・柏崎平野・国中平野では認められず、高田平野はその形成過程において沖積層堆積後に基盤の隆起運動がおこなわれたものと考えられている。屋敷削付遺跡をのせる高田面は高田平野のはば全域を覆い最も広く分布する。この高田面の下位約1mに高田面を浸食して形成された関川面が分布する。さらに、関川面の下位1~2mに関川氾濫原面が形成されている。この面は最も低い面で、関川の流路が堤防で固定される前は、洪水が発生した際に濁流が自由に氾濫していたところである。平野に分布する遺跡の時代を検討すると、高田面上には遺跡が多く分布するが、関川の左右両岸で遺跡の様子が異なっている。右岸では自然堤防上に奈良～平安時代の遺跡が広く分布し、その下層に古墳時代の遺物包含層が存在することが多い。左岸では堆積物により埋没している遺跡の例が多く、これまで中世～平安・古墳時代末・同初頭の3時期の包含層が検出されている。これらから高田面は古墳時代初頭から段丘化はじめ、数回におよぶ洪水性堆積物によって覆われながら平安時代には完全に段丘化したものと考えられている。一方、関川面の遺跡は数が少なく、ほとんどが中世以降の遺跡である。これは段丘化した時期が中世以降であることを示している〔高田平野団体研究グループ1981、岡本1999〕。

屋敷削付遺跡は戸野目川左岸に位置し、約1.2km西には関川、約4km東には飯田川が流れている。関川と飯田川の間には自然堤防が点在し、これらに沿って戸野目川と重川が北流している。屋敷削付遺跡以北の下流域には多くの古代の遺跡が確認されており、そのほとんどが自然堤防付近に立地する。また、両河川上流部では川から離れたところに自然堤防がみられる。これは、これらの川の流路が長期間にわたり



第2図 高田平野の地形と遺跡の立地

[北陸地方建設局北陸技術事務所 1981 新潟県農地部農村総合整備課 1980,1981 を改変]

一定していたわけではなく、頻繁な流路の変更があったことを表している。本遺跡だけでなく、越前遺跡・孤宮遺跡といった隣接する古代の遺跡の多くで埋没河川が検出されているという事実は、関川と飯田川に挟まれた沖積地において大小の河川がたびたび流路を変更したことを良く示している。本遺跡から約1km離れた三角田遺跡では、8世紀中葉以降の洪水層によって埋没した後、再度集落が形成されている。このことは、河川の氾濫が遺跡の盛衰と大きく関わる可能性を強く暗示していると言えるだろう。

## 2 歴史的環境

高田平野とその周辺に広がる古代の遺跡分布は第3図に示すとおりである。当該地の遺跡は、上越市教育委員会が昭和に実施した詳細分布調査〔上越市教育委員会1981〕やその後の開発に伴う発掘調査などにより、遺跡の存在、範囲や内容が次第に明らかになってきた。しかし、多くの遺跡は未だ発見されずに地中に埋没していると考えられる。

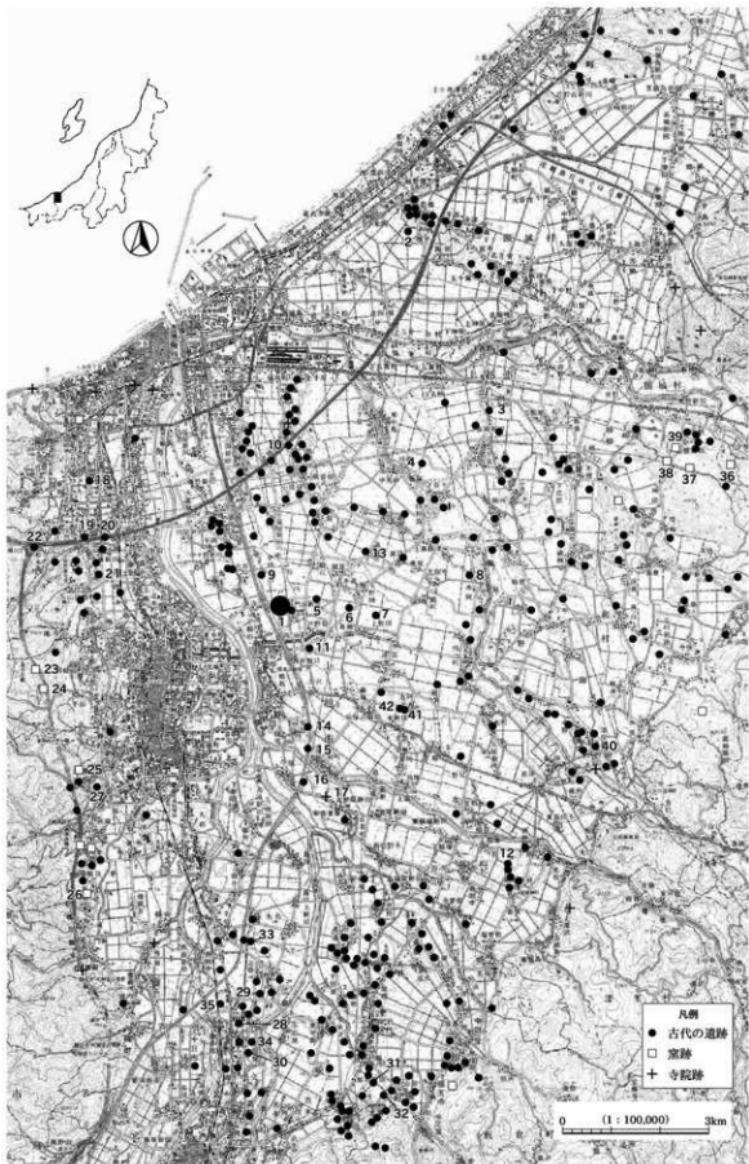
『続日本紀』の大宝2(701)年3月の条には、越中国の4郡を越後国に分割したことが記されている。その4郡とは、頸城郡・古志郡・蒲原郡・魚沼郡と推定されている。『和名類聚抄』には「国府在頸城郡」とあり、頸城郡内には越後国府があったようである。また、頸城郡の郷として10郷が記され、このうち沼川が西頸城で、ほか9郷は高田平野にあったと推定される。相沢央は郷名記載の順序と高田平野の遺跡分布の傾向から、宇津郷を関川・戸野目川下流域、栗原郷は栗原遺跡を含む矢代川と関川中流の左岸、荒木郷を大熊川流域、板倉郷を別所川流域、高津郷を飯田川中流域、物部郷を櫛池川中流域、五十公郷を保倉川上流域、夷守郷を旧保倉川の自然堤防上の遺跡集中域、佐味郷は柿崎川流域を含む旧大潟以北に比定している〔相沢2004〕。これによれば、屋敷割付遺跡は宇津郷に含まれる。

高田平野とその周辺部に位置する古代の遺跡は、関川やその他の中小河川が形成した自然堤防上、南東部の丘陵周辺に発達した扇状地の扇頂部と扇端部、関川と矢代川に挟まれた河岸段丘や微高地上、西頸城丘陵の裾部にその多くが分布する。

関川右岸の高田面線辺に位置する今池遺跡(16)は8世紀中葉～9世紀後半の遺跡で、堀立柱建物跡・柵・竪穴住居・井戸・土坑・溝などが検出された。堀立柱建物は100棟以上検出され、大半が東西棟である。出土遺物では円面鏡・瓦塔や畿内からの搬入土器などが注目される。越後国府推定地の一つと考えられているが、政庁と断定できない。今池遺跡の南東700mの地点に国分寺跡と想定される本長者原磨寺(17)がある。基壇と思われる遺構が検出され、瓦も出土していることから、古代寺院であることが確

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	屋敷割付遺跡	古代	15	下斎遺跡	弥生～古代	29	倉田遺跡	古代
2	根井八景跡	古代	16	今池遺跡	古墳・古代	30	杉田遺跡	古代
3	前田別遺跡	古代	17	本長者原磨寺	古代	31	仲田遺跡	古代・中世
4	前田遺跡	古代	18	四ツ屋遺跡	古代	32	五反田遺跡	古代
5	孤宮遺跡	鶴文・古墳・古代	19	八反田遺跡	古墳～中世	33	新ノ上遺跡	古墳・古代
6	三角田遺跡	古代	20	一之山遺跡	古墳～中世	34	月岡遺跡	古墳・古代
7	延命寺遺跡	古墳・古代	21	江向遺跡	古代・中世	35	東沖遺跡	古代
8	下沼遺跡	古墳～中世	22	山畠遺跡	古代	36	今熊2号古窯跡	平安
9	越前遺跡	古代	23	浅寺古窯跡群	古代	37	神田長崎1号古窯跡	平安
10	宮野遺跡	平安	24	大貫六古窯跡群	古代	38	太野古窯跡	平安
11	中島廻ノ原遺跡	古墳・古代	25	西橋六古窯跡群	古代	39	神田長崎2号古窯跡	奈良・平安
12	等仙寺遺跡	古代	26	下馬古窯跡群	古代	40	法花寺遺跡	古代
13	保坂遺跡	古代・中世	27	岩ノ原遺跡	古代	41	八幡地遺跡	古代
14	子安遺跡	弥生～中世	28	栗原遺跡	古代	42	佛寺遺跡	古代

第1表 周辺の遺跡



第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡  
〔国土地理院発行「高田東部」「高田西部」「飯山」「妙高山」「絲崎」 1:50,000原図〕

実である〔小島ほか1984〕。今池遺跡から1.2km南東の西松野木地区には条里制地割の遺構もみられることが、これらは有機的な関係を持つと考えられている〔坂井ほか1984〕。近接する子安遺跡（14）は古墳時代～中世の大遺跡であるが、今池遺跡の衰退後、遺構が増加し、この地域の中核の遺跡となる。施釉陶器や二彩陶器・瓦塔・海獣葡萄鏡が出土している〔笠澤2003〕。国府および国分寺の位置は今日まで先学によって論じられてきた。上越市善光寺浜・長者原・旧三和村法花寺・旧板倉町田井・国川・旧新井市堂庭・国賀・栗原・旧妙高村今府など諸説があるが、未だ決着をみていない。近年、考古学的には今池遺跡、本長者原磨寺の周辺に国府と国分寺が存在した可能性が高いとされている〔坂井ほか1984〕。星敷削付遺跡はこれらの大規模遺跡が集中する地域から北に3～3.5kmに位置する。

本遺跡近隣では、北西0.5kmの地点に越前遺跡（9）があり、主に8世紀後半～10世紀初頭の遺跡で、大型の堀立柱建物・總柱建物などが河川に沿うように構築されていた。遺物は、土師器・須恵器・灰釉陶器・綠釉陶器などの土器類のほか、木製品では柾舟などの律令祭祀具が多く出土している。星敷削付遺跡の東0.7kmには孤宮遺跡（5）が位置し、主に9世紀前葉～後葉の遺構・遺物が主体となる。堀立柱建物のほか数多くの土坑・ピットが検出されている。さらに東0.7kmの地点に三角田遺跡（6）、その東0.5kmに延命寺遺跡（7）が位置する。三角田遺跡は奈良時代の下層部と平安時代～中世の上層部に分かれる。遺存状況の良好な下層の遺構・遺物のあり方から、当時の集落の姿がうかがえる。集落は数棟の建物と広場、生産域（烟跡）によって構成され、自給自足的な生業の形態を確認することができる〔沢田ほか2006〕。延命寺遺跡は7世紀～8世紀中葉の遺跡で、7世紀では竪穴建物や平地建物の周辺に土坑・ピットが位置する集落構造で、8世紀になると盛土をもつ堀立柱建物が確認できる。8世紀の出土遺物は木製祭祀具のほか、木筒20点が出土し、木筒の記述から当時、延命寺遺跡周辺は「野田村」という集落であったこととその集落の当時の様子をうかがい知ることができる。南東に1kmの地点の中島廻り遺跡（11）では堀立柱建物跡などから8世紀前半の土器が多く出土した〔小島1991〕。北東2kmの保坂遺跡（13）は9世紀後半～10世紀前半を主体とし、總柱の堀立柱建物群が道路状遺構もしくは区画溝と考えられる遺構を基準に整然と配置され、溝に一括廻棄された土師器や大型瓶・三足盤などの特異な器形の綠釉陶器が出土した〔笠澤・中村・大居1997〕。宮野遺跡（10）では布掘りの建物跡などが検出され、転用硯・石鈴・施釉陶器が出土した。莊園関連遺跡と考えられている〔戸根ほか1985〕。櫛井A遺跡（2）では、「北館」、「北」、「莊」等の墨書き土器、農事における莊園労働の大規模な役夫勤員の様子がうかがわれる。「以四月五日御田阿口夫事」と書かれた木筒が出土し、古代莊園の可能性が高いと推定された〔秦・小林・草野・高野・小林1998：小林1998〕。

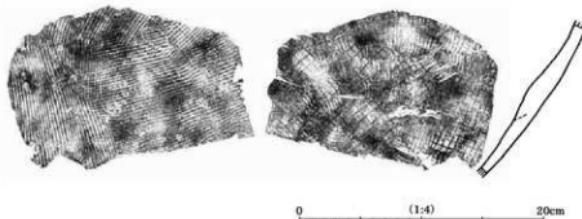
東部・南東部の丘陵周辺では旧板倉町五反田遺跡（32）で平安時代の綠釉陶器と中国製白磁碗が出土し〔渡邊ほか2005〕、旧清里村等仙寺遺跡（12）では竪穴式住居9棟、堀立柱建物6棟などが検出されている〔秦ほか1999〕。寺院としては、旧三和村法花寺遺跡（40）がある。礎石や石敷遺構が発見されており、桁行6間、梁行3間の建物は基壇を持つが瓦ではなく板葺きの建物と思われ、平安末期のものと推定されている〔秦・坂井1990〕。また、東頭城丘陵裾部は高田平野周辺部最大の窯業产地であり、旧三和村末野から旧浦川原村今熊にかけて窯跡群（36～39）が展開する〔笠澤2002〕。

関川と矢代川に挟まれた河岸段丘や微高地には、栗原遺跡（28）、月岡遺跡（34）、倉田遺跡（29）、杉明遺跡（30）、東沖遺跡（35）などがある。栗原遺跡は、塔の可能性のある基壇、大型の堀立柱建物跡などが検出され、郡衙に関連する遺跡と考えられている〔坂井1983〕。月岡遺跡は奈良時代の後半から平安時代の集落で、当該期の中核となる集落と考えられている〔高橋1985〕。東沖遺跡は栗原遺跡とは

ほぼ同じ8世紀初頭～中頃の集落で、竪穴住居と堀立柱建物からなる。桁行16mを超える堀立柱建物跡などが検出された〔新井市教育委員会2000〕。杉明遺跡は栗原遺跡の北に隣接する7世紀前葉～末頃の集落遺跡で、洪水で埋没した竪穴住居跡、焼失住居跡が検出されており、一括土器が多い。その衰退と前後して栗原遺跡が成立したと推定されている〔笹澤2003〕。倉田遺跡は、栗原遺跡と同じ軒丸瓦や円面鏡が出土しており、官衙関連機能を栗原遺跡と分有していた可能性も推察されている〔高橋1996〕。

西頸城丘陵の裾部では春日山山麓の冲積地にある古代の遺跡に一之口遺跡(20)、八反田遺跡(19)などがある。一之口遺跡は西地区と東地区に分かれ、西地区は9世紀後半～10世紀前半の遺跡で、堀立柱建物跡・井戸・烟跡などが検出された集落で、東地区では、溝・井戸などが検出され、木製の祭祀具や灯明皿として使用された土師器が多数出土した。八反田遺跡では平安時代の堀立柱建物跡5棟などが検出された。9世紀後半の江向遺跡(21)からは県内初の古代青銅印が出土し〔北野2003〕、四ツ屋遺跡(18)からは大型庇付堀立柱建物跡が検出され、石帶や多量の施釉陶器が出土した〔四ツ屋遺跡調査団1988〕。岩ノ原遺跡(27)では「石井庄」「石庄」と書かれた墨書き土器が出土し、「東大寺領石井庄」の莊園遺跡である可能性が高く、遺構群は建物の規模や配置、柱穴の規模などから石井庄の中心施設ではないが、庄所の一部であると考えられている〔高橋ほか2007〕。また、西頸城丘陵には下馬場(26)・向橋(25)・大貫(24)・淹寺(23)などの窯跡群が確認されている。向橋窯跡群は8世紀前葉の瓦陶兼業窯跡で、本長者原廃寺出土瓦の産地として推定されている。

屋敷割付遺跡のすぐ東隣を流れる戸野目川沿いには、本遺跡より下流部で比較的多くの遺跡が存在するものの上流部ではほとんどその分布が認められない。今回、調査期間の合間にむけて戸野目川上流部の遺跡踏査を行った。現在の戸野目川は「頭なし川」で、小規模な用・排水路が集まって源をなしている。流路がはつきりと姿を現すのは稻集落あたりからである。地形から判断するに、元々は櫛池川の支流であったと考えるのが妥当であろう。半日という短期間の踏査であったため、新たな遺跡を発見するには至らなかつたが、すでに周知化されている八幡地遺跡(41)と弥彦煙遺跡(42)で遺物の散布を認めることができた。八幡地遺跡は黒土が良く発達した畑で、ほとんどが小片だが比較的多くの遺物が散布している。土師器は少なく、須恵器が多い印象を受けた。第4図は須恵器大型甕の大破片で、外面は平行タタキ、内面は格子目の当て具痕が明瞭である。器壁が肥厚した部分は粘土帶の接合部で、底部は丸底になると思われる。また隣接する弥彦煙遺跡は多くが客土で覆われ、遺物の散布もほとんど認められなかった。須恵器杯の小破片2点を採集することができたのみである。



第4図 ハ幡地遺跡探集資料

## 第III章 調査の概要

### 1 グリッドの設定

調査は、道を間に挟みながら、東西約300m・南北約60mの細長い範囲を対象とした。グリッドの設定にあたっては、道路法線が緩やかにカーブする地点に調査区があることから、法線のセンターラインを利用することが出来なかった。そこで、調査区間に設けられた上越三和道路基準杭のうち、No.40202（世界測地系X=125393.207・Y=-20083.887）とNo.40203（世界測地系X=125403.176・Y=-19999.176、共に4級基準点）を結ぶ線を東西方向の主軸とし、これに直行して南北基準線を設定した（第5図）。グリッド南北方向の基準線は真北から6.77° 西偏している。なお、調査区内の主な座標点は次のとおりである。2D1（X=125356.983・Y=-20220.585）、29D1（X=125388.537・Y=-19952.446）。

グリッドの名称は、東西方向は算用数字を使用して西から東に向かい「1、2、3、4…」、南北方向は北から南に向かい「A、B、C、D…」とし、基準線の交点を「1A、1B、1C…」と呼称した。調査においては大小2種類のグリッドを使用し、基準線に囲まれた10m四方を大グリッドとし、これを2m四方に25分割したものを小グリッドとした。グリッド名称は北西隅の交点とし、例えば基準杭40202の東側の区画は「16B」、西側の区画は「15B」となる。小グリッドは1～25の算用数字で表し、北西隅を1、南東隅を25となるよう番号を付し、「3A12」のように大グリッドと連名で呼称した。なお、基準杭40202は16B1グリッドに該当する。

### 2 基本層序

遺跡は戸野目川左岸の微高地に立地し、調査区現況は水田で東側から西側へと緩やかに傾斜する。遺跡内の地形をみると、西区西側（2～8列グリッド）に位置するSD1の川跡付近のIVa層上面の標高は6.8～6.9mと低い。遺跡内でもっとも標高の高い7.0～7.2mの区域は西区東側（9～15列）に位置するが、SD1の流路に平行している。ここから東へ約150mの東区Dトレンチの標高は6.8～6.9mである。つまり、遺跡の存在した9世紀初頭頃はSD1右岸に自然堤防状の微高地があり、現在の戸野目川付近の標高は低かったことがわかる。したがって、遺跡が存在した当時、戸野目川の流路は現在と異なっていた可能性がある。

基本層序は、自然流路SD1の底面を確認するための深掘りを1部で行ったため、I a～X層までの14枚の層序を識別した。各土層の特徴は次のとおりである。

盛土： 便宜上、盛土を基本層序から除外した。

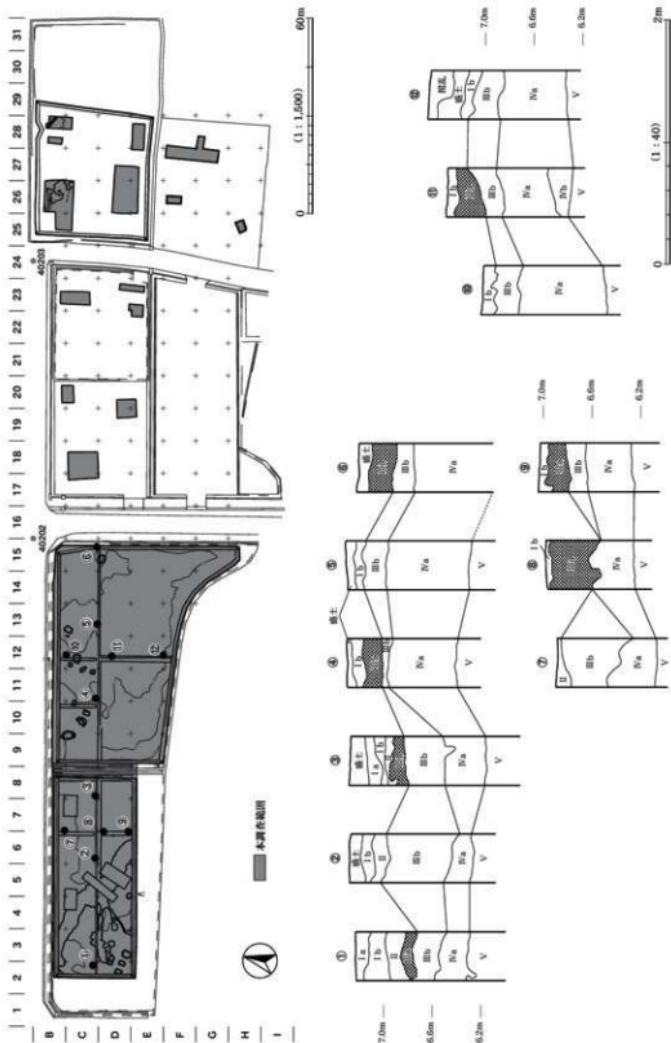
I a層： 灰色粘質土。粘性ややあり、しまりあり。炭化物（径1cm程度）を少量含む。旧耕作土。

I b層： オリーブ黒色粘質土。粘性あり、しまりややあり。白色砂粒砂を部分的に少量含む。旧耕作土。

II 層： 黒色粘質土。粘性あり、しまりなし。少量の遺物を含む。

III a層： 暗灰色粘質土。粘性ややあり、しまりややあり。最も多くの遺物を含む層序。また、SX12・

SK21・SD1～4の遺構確認面でもある。



第5図 クリッド設定図及び土層柱状図

- III b層： 灰色粘質土。粘性あり、しまりややあり。III a層に比べて少ないものの遺物を包含する。人為的埋土坑の多くの確認面。III a層と比べて明るい色調を示す。
- IV a層： 緑灰色粘質土。粘性あり、しまりなし。オリーブ灰色シルトを多量含む。
- IV b層： オリーブ灰色粘質土。粘性非常にあり、しまりなし。白色細粒砂をまばらに少量含む。
- V 層： 黒色粘質土。粘性あり、しまりなし。ところによりIV層起源の緑灰色粘質土をマーブル状に含む。
- VI 層： 暗青灰色粘質土。粘性あり、しまりあり。炭化物をごく少量含む。
- VII 層： 緑黒色粘質土。粘性あり、しまりあり。暗緑灰色粘質土をまだらに少量含む。
- VIII 層： 黒色粘質土。粘性あり、しまりあり。
- IX 層： 暗緑灰色粘質土。粘性あり、しまりあり。暗緑灰色砂を多く含む。
- X 層： 緑灰色粘土。粘性非常にあり、しまりあり。オリーブ黒色粘質土少量含む。植物遺体を少量含む。

試掘確認調査により遺物包含層とされたII層は、西区西側の低い地区（2～8グリッド列）で主に確認されたのみで、西区東側（9～15グリッド列）ではほとんど堆積が認められなかつた（第5図土層柱状図）。遺物は主にIII層から出土した。III層はIII a・III bに分層されるが、両者の違いが微妙な色調の変化にあることから分層できなかった地点もある。土層柱状図②（6C21グリッド）でやや異なるあり方を示すものの、III b層とIV a層は多くの地点で同じ起伏を示す。このことから、これら2枚の土層が示す地形の高低は旧地形を反映したものと考えられ、11C・12Cグリッドで遺構・遺物が集中することと、ここが微高地をなす（柱状図④・⑤）ことの間には関連性があるとするのが妥当であろう。

## 第IV章 遺構

### 1 概要

屋敷割付遺跡では、平安時代の土坑16基・ピット2基・溝1条、近世(17世紀)の井戸1基を検出した。

主体となる平安時代の遺構は、掘立柱建物や井戸・畝状溝といった居住域や生産域を示すものが皆無で、性格不明の遺構がほとんどである。なお、調査区を横断するように検出された自然流路SD1は、遺構の分布や遺跡の立地と関連する可能性が高いため、遺構に準じて本章で取り扱うこととする。

遺構の種別を示す略号は、既刊の報告書に従い土坑(SK)、ピット(P)、井戸(SE)、溝および自然流路(SD)、性格不明(SX)を基本とした。しかし、土坑および「人為的埋土坑」[坂上2003]については「SK」と「SX」の2つの記号が混在したままである。これは検出時の所見を整理作業時に見直した結果によるものだが、注記や観察データをそのまま活かすためにあえて訂正・統一していない。

平安時代の遺構はほとんどが西区で検出されたが、なかでも2D～4Dグリッドと10C～13Cグリッド周辺の2か所で分布の集中が認められる(図面図版1)。ここでは前者を西グループ、後者を東グループと仮称する。すでに第Ⅲ章2で述べたように、本遺跡の旧地形は、14・15グリッド列付近を微高地として東西に向かって緩やかに傾斜する。これと遺構分布を重ねると、0.2mというわずかな標高差ではあるものの、東グループは西区の中で最も高い場所、逆に西グループは最も低い場所に立地することになる。遺構は調査区外へとさらに続くことが明らかであるため、2か所に分かれる分布状況が微地形とどれだけ関係性を持つのか判断は難しいが、自然流路を境界として対立するような様相を示す点は興味深い。一方、同じ微高地上となる10～15D～Fグリッドでは遺構が全く検出されなかった。当該グリッドにおいてもⅢ層が安定して存在していることから、この地点だけが削平されたとは考えられず、本遺跡全体の中でこの空白域が何らかの意味を持つと考えている。

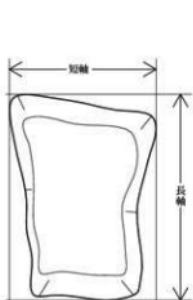
記号	番号	平面圖版	写真圖版	グリッド	平面形	長(cm)	幅(cm)	深(cm)	方位	底面標高(m)	覆土	備考
P	5	3	46	6D15	円形	30	30	13	西偏6°	6.797	単層	
SX	12	5	7・17～19	9C5	楕円形	416	264	40	西偏9°	6.607	水平レーンズ	
SX	13	5	6・20	12C7	円形	268	240	52	西偏69°	6.629	レンズ	
SX	18	4	5・24	12C1	円形	138	120	36	東偏51°	6.672	単層	人為的埋土坑
SX	19	5	25～26	11C15	長方形	216	116	34	西偏35°	6.726	単層	人為的埋土坑
SX	20	4	27	11C25	長方形	154	128	36	西偏16°	6.778	単層	人為的埋土坑
SK	21	6	8・13～16	13C1	長方形	256	188	24	東偏24°	6.847	レンズ	
SX	22	3	28～29	10C10	楕円形	(140)	124	48	東偏84°	6.534	単層	人為的埋土坑
SX	23	4	30～31	10C12	不規則形	292	212	58	東偏49°	6.291	単層	人為的埋土坑
SX	24	4	33～34	10C19	長方形	196	136	32	東偏15°	6.597	人為的埋土坑	
P	25	5	47	13C1	円形	56	24	72	西偏1°	6.235	レンズ	
SX	27	5	35～36	15D2	円形	240	220	40	東偏74°	6.631	単層	人為的埋土坑
SX	28	3	37～38	2D19	長方形	208	152	54	東偏12°	6.18	単層	人為的埋土坑
SX	29	3	39～40	2D20	長方形	190	140	40	東偏12°	6.374	単層	人為的埋土坑
SX	30	4	41～42	3D21	長方形	296	220	66	東偏8°	6.171	単層	人為的埋土坑
SX	31	4	43～44	2D10	楕円形	174	140	60	東偏17°	6.147	単層	人為的埋土坑
SX	32	3	44～45	5D21	円形	178	(160)	60	東偏85°	6.327	単層	人為的埋土坑
SX	33	4	43	3D11	楕円形	(184)	160	42	西偏75°	6.39	単層	人為的埋土坑

第2表 遺構観察表

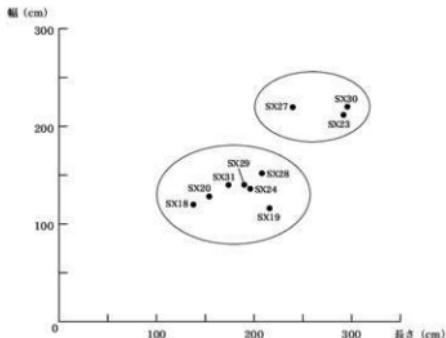
## 2 人為的埋土土坑

地山であるⅢ層をブロック状に含む土坑であり、SX18・19・20・22・23・24・27・28・29・30・31・32・33の13基が該当する。最も多く検出した遺構であり、本遺跡を特徴づける遺構と言えよう。調査当初は、平面プランが不整形であることや、ブロック状に交じり合う覆土のあり方などから近現代の搅乱と認識した。しかし、少數ながら平安時代の遺物が出土したことに加えて、検出層位がⅢb層に限られること、平安時代の遺物集中地点であるSX17の下位から検出された事から、平安時代以前の遺構と判断するに至った。

覆土は、黒色粘質シルトと灰色粘質シルトがブロック状に混じり合う（写真図版12-5）。前者がⅡ層、後者がⅢ層に由来することから、遺構はⅡ層上位より掘削されたものと判断できる。また、覆土を構成するシルトブロックが比較的純粹であることから、土坑掘削後の比較短期間のうちに、掘削時の堆土によって人為的に埋め戻されたと推定される。よってこれらの遺構を「人為的埋土土坑」【坂上2003】と本稿では呼称する。遺構の機能推定のため、いくつかの遺構について土坑を採取し、3~5mmメッシュの金属製フルイで水洗選別を行った。その結果、一定量の炭化種子を検出することができた。種実分析の結果、その多くがカヤツリグサ科と同定されている（第VI章参照）。



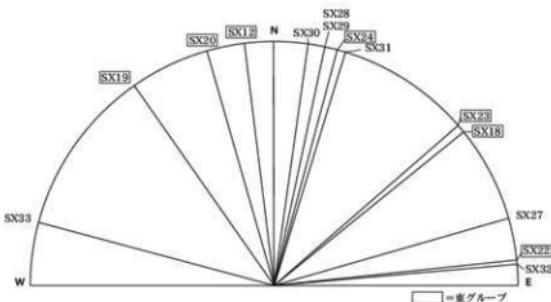
第6図 土坑計測位置



第7図 人為的埋土土坑(SX)の規模

平面形には一定した形態が認められないが、楕円形あるいは卵丸長方形に分類されるものが多い。また、底面の凹凸が激しいものが比較的目立つ。長軸と短軸をもとに規模の分布を見てみると（第7図）、長165cm×短135cm前後の小型土坑と、長270cm×短215cm周辺の大型土坑に分類することができる。分布は、9~13Cグリッドと2~5Dグリッドの東西2か所にまとまりが認められる（図面図版1）。ここでは、前者を東グループ（SX19・29・12・24・23・18・22）、後者を西グループ（SX33・30・28・29・31）と仮称する。土坑の分布が調査区外へさらに延びていることから、この分布状況が実態をどれだけ反映しているのか判断できない。しかし、東西各グループが小型土坑を主体として大型土坑を含むことを指摘することができる。

北に対する遺構の長軸方向の傾き（第8図）を見てみると、ばらつきが多いものの、西偏16度～東偏



第8図 人為的埋土土坑（SX）の主軸方位分布

17度の間に14基中7基の土坑が集中し、北方位に対する指向性が窺われるかのようである。また、東西グループに分けてさらに検討を加えてみると、東グループでは真西に長軸が寄るもののが欠落するものの、東偏84度～西偏35度までの119度の範囲にわたってある程度の間隔をもって分布するようである。また平面的には、北西方向に開く半円状の分布を呈する様子がうかがえる。一方西グループでは、調査区境界に接して造構が検出されたため、分布状況をうかがい知ることが難しいが、SX28・29・30がほぼ軸を描いていることが特徴的である。

造構の重複はほとんど認められず、SX31と33で切り合う以外は全て単独で検出された。底面および壁面が凹凸をなすことが特徴的で、SX20では壁面がオーバーハングしている。一定の形態への指向性が弱いと言うことができるだろう。

### 3 土坑・ピット

長軸2m以上・深さが比較的浅い形態で、覆土がレンズ状堆積を示すものを土坑とする。形態や規模では人為的埋土土坑と大きく変わることはない。また、長軸1m未満で比較的細く深いものをピットとする。検出層位は共にⅢa層またはⅢb層で、土坑はSX12・13、SK21の3基、ピットはP25の1基がある。

**SX12** 検出された土坑のなかで最大の規模を計る。長軸円形の平面形を呈し、長軸と短軸に2か所のテラスを持つ。底面は比較的平坦であるものの、所々で浅い凹みを生じている。覆土は5枚に分層されたが、土質や遺物の混入状況から上下2層にまとめるができる。上層は1～2層で、黒味が強く、Ⅱ層に由来することが明らかである。SX12が所在する10Cグリッド周辺では、植物の根による斑状の浅い落ち込みがⅢ層上面で顕著に認められた。2層下端の削離面が激しく凹凸をなす原因も植物の根による搅乱の可能性が高い。下層は3～5層が該当し、青味がかる灰色を基調とする。遺物は下層のみから出土し、本遺跡で検出された遺構の中で最も多くの遺物量が認められた。遺物は、壁面から中央に向かって傾斜するように出土しており、土坑が擂鉢状に埋没する過程で投棄されたことが明らかであった。また、他の遺構や包含層出土遺物とは異なり土器・煮炊具が多い点が特徴的で、須恵器に比べて大型の破片が目立つ。

**SX13** 平面形がアーマーバ状の不整形を呈し、底面は凹凸が激しい。任意に設定したトレンチの断面で

ようやく検出することができたものの、覆土がⅢa層に酷似していたため、平面による識別は困難であった（写真図版12-6）。検出時のセクションの観察では、遺構外から土層が落ち込むような様子が認められたため、遺構ではない可能性を考慮して調査を進めた。掘り進めた結果、浅いながらも他の土坑と同じ規模で完掘することができたことから土坑として取り扱うが、自然の深い窪みである可能性を否定しきれない。遺物は、実測に耐えないような細片が1層上面で出土した他、2層からは須恵器杯蓋の破片1点が出土した。

**SK21** 平面形はやや不定形ながら隅丸方形をなし、底面は比較的平坦となる。壁の立ち上がりが長軸の南北方向で異なり、北側では直立気味、南側ではやや急なスロープ状となる。覆土は3枚に分層され、2層下端が凸凹をなす。SX12と同様に、本遺構でも比較的多くの遺物が出土しており、その多くが2層からの出土である。遺物の多くが壁際から中央に向かって傾斜しながら出土したが、完形品の須恵器無台杯（図版7-19）は層の傾斜と異なる方向に傾いて出土しており注目される（写真図版12-8）。

**P25** 本遺跡唯一のピットである。当初、半裁のうえ調査を進めたが、予想以上に深かつたため途中から断ち割り調査に切り替えた（写真46・47）。よって、半分しか記録化していない。覆土は6枚に分層され、各層が積み重なるようにほぼ水平に堆積しており、柱の痕跡は認められなかった。遺物は、土師器小型甕の胴下部片1点が最下層の6層から出土したのみである。

#### 4 溝

平安時代の遺構としては東区で唯一検出された溝（SD111）である。調査区東端の28Bグリッドに所在する。現状で長4.7m、幅0.6～0.7mを計り、深さは0.3m弱と浅い。覆土2層から須恵器横瓶の破片（27）が1点出土した事に加えて、平安時代の土坑であるSX12の覆土と近似することから帰属時期を判断した。しかし遺物の出土量は1点と少なく、また近世の井戸であるSE110とも覆土の特徴が若干似ることから、近世に帰属する可能性も否定できない。

#### 5 自然流路

西区西側調査区（2～6グリッド列）を北西から南東方向に横切る形で検出された自然流路（SD1）である。現状で長さ42m、幅3.6～8.2mを測る。試掘確認調査時にすでに存在が知られていたことから、Ⅲa層上面で平面的な広がりを確認した後、最も川幅が安定した場所にトレントを設け、まずは堆積状況の把握に努めた。その結果、新旧2本の流路が重複していることが判明した。平安時代の土器が3点出土した以外に遺物が認められなかったことから、平面プランの検出とトレント掘削のみで調査を終了した。なお、セクション図を作成したトレント以外にも、4B～Cグリッドに別のトレントを設けて断面観察を行っており、同様の堆積状況を確認している。

覆土は、未分解の植物遺体を多く含む上層を主体として、白色細粒砂を比較的多く含むシルト層が貫入する。植物遺体の堆積が止水状態を暗示することから、川の流れが弱くなり、次第に湿地化していく過程をこの堆積状況は示しているよう。なお顕微鏡観察の結果、白色細粒砂の中に火山ガラスが多く含まれることが判明している（第VI章2）。この細粒砂を含むシルト層が流水による堆積であるとすれば、火山ガラスは上流部から運ばれたものと言え、川が埋積する過程で造山活動の余波を受けた可能性が想定される。ま

た、新流路はⅠ層によって埋没しており、遅くとも近世までは浅い窪みとして残存していた可能性が高い。しかし、地元住民に聞き取り調査を行ったところ、遺跡付近が湿地状の深田であったとの証言は得たが、河川の存在を記憶している人はいなかった。

4D グリッド付近では3条の不整形な溝が分岐する。断面を観察してみると、SD2が一定の深さを持ち、半円形の断面形態であるのに比べて、SD3・4は浅く、底面の凹凸が激しいという違いがある。比較的直線的に延びる平面形も考慮して、SD2が人工的な溝である可能性も想定したが、それを確認するだけの材料を揃えることができなかつた。

遺物は、新流路を埋めるⅡ層から須恵器有台杯の底部破片（28）が、旧流路では7層から須恵器無台杯（29）と土師器無台碗（30）、8層から土師器無台碗（31）がそれぞれ出土した。29～31は包含層遺物に比べて遺存率が高い。

## 6 井 戸

17世紀前半に帰属する井戸（SE110）である。東区26B24グリッドに所在する。試掘確認調査により古代に帰属する井戸とされていたが、本調査の結果、平安時代の土器と共に17世紀前半の遺物が出土したことから近世のものと判明した。平面形は1辺0.5～0.6mの隅丸四角形で、深さは1.5mを計る。調査当初は、造構プランを壊さぬよう半蔵掘削を進めたが、予想以上に深くなつたことと、途中で覆土が崩落してしまつたことから、断ち割り調査に切り替えた。覆土は灰色シルトブロックを多く含む黒色シルトで、平安時代の造構としたSD111と覆土の特徴が似る。調査時の湧水は造構底面から30cm程度に留まり、現在は井戸としての機能を持ち得ない。覆土は2枚に分層され、2層上部から近世陶器（152）が、2層最下部から須恵器無台杯の底部片（150）と下駄（155）が出土した。

# 第V章 遺物

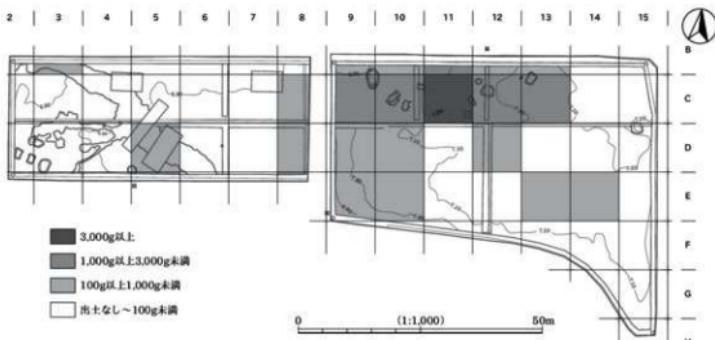
## 1 概要

屋敷割付遺跡から出土した遺物はコンテナ7箱と少ない。そのほとんどが平安時代の土器で、他に近世陶器、石器、木製品がわずかにあるのみである。遺物が最も多く出土したのは11Cグリッドを中心とした9～13Cグリッド周辺のみで、他の地点は希薄である（第9図）。高田平野で調査された古代の集落遺跡では、遺物と遺構の分布が概ね一致するのが常態である。しかし本遺跡の場合、9C～13Cグリッドにおいて同様の現象を指摘することができるものの、2D～4Dグリッドでは複数の遺構検出が認められるながら遺物はほとんど出土していない。一方、微地形との関連を見てみると、標高の高い地点で比較的多くの遺物が出土する一方で、11～15・D～Fグリッドでは出土量が希薄となる。遺物の分布状況には様々なバイアスが想定され、遺構や微地形と関係について単純に判断することはできないが、遺物分布の中心域は調査区外の北方に存在すると想定される。

ここではまず主体となる平安時代の土器について述べ、その後、それ以外の遺物について取り上げることとする。

## 2 平安時代の土器

須恵器・土師器があるものの、大半が須恵器で土師器はごく少ない。食膳具の形態的特徴を指標にして、春日真実氏による編年〔春日2005〕と対照すると、IV 2～3期（8世紀末～9世紀初頭）に位置づけることができる。このことから、須恵器が主体を占め、若干の土師器が加わるという本遺跡における土器様相は、土器組成の主体が須恵器から土師器へと移り変わる当該期のあり方を反映した結果と考えてよいだろう。なお、遺物の固化にあたっては、全体量が少なかったことから、直径が復元できる資料のはほとんどを実測



第9図 土器重量分布

のうえ掲載した。

### A 器種分類

出土量が少ないと反映してか、器種のバラエティーは少ない。ここでは大まかな分類を提示して、以後の記述の便をはかることとする(第10図)。

#### 須恵器

食膳具と貯蔵具から構成され、有台杯・無台杯・杯蓋・長頸瓶・横瓶・甕などの器種がある。食膳具の胎土には次の3種がある。

胎土①群：小型の石英・白色粒子を含み、比較的精良で緻密な胎土の一群。高田平野東部の末野・日向窯跡群で主体的にされるもの。

胎土②群：砂質分が強く、触るとザラザラした感触が強い一群。高田平野西部に点在する淹寺窯跡群などに特徴的にされるもの。

胎土③群：白色粒子を比較的多く含むもので、①・②と比べて肌理細かく硬質の感がある。佐渡市小泊窯跡群などの特徴とされるもの。

本遺跡の須恵器は胎土①群がほとんどを占め、明らかな胎土②・③群は少なく、よって本文の記述および観察表では、胎土②・③群のみを記載し、胎土①群は基本的に触れない。

**有台杯** 身が浅いものを有台杯A、深いものを有台杯Bとする。有台杯Aは法量からI・IIに分類することができる。Iは口径12~13.5cm前後・器高3.5~4.5cmのもの、IIは口径10~11cm前後・器高3~4.5cmのものとする。Iが主体を占め、IIは少ない。I・II共に底面切り離し痕にはヘラ切りと糸切りの両方がある。

**無台杯** 法量からI・II・IIIに分類することができる。Iは口径13cm以上・器高3.5~4cm前後のもの、IIは口径12~12.5cm前後・器高3~3.5cm前後のもの、IIIは口径11cm以下のものとする。III

#### 須恵器



第10図 器種分類図

は形態的にも I・II と異なり、底面内外が平らで、底面から直立気味に立ち上がりながら緩やかに外傾するプロポーションを持つ。糸切り底が多い。

**杯 蓋** 器高が高くて山笠状を呈する A と、天井部が広くて低平な B とがあり、後者が主体を占める。口径の大きさから I・II・III に分類することができる。I は口径 15cm 以上の大型品である。ほとんどが破片資料で口径も推定値が多いため便宜的な分類である。II は口径 13~14cm 前後の中型品で、本遺跡では杯蓋のほとんどを占める。III は口径 10~11cm 前後の小型品で例数は少ない。法量的にも出土点数のうえからも、杯蓋 II が有台杯 A I とセットをなすものと判断される。点数が少ないと不詳な点が多いが、I は有台杯 B と、III は有台杯 A II とセットになる可能性が考えられる。

**長頸瓶** 頸部が細く長いものを瓶とする。本遺跡では破片資料ばかりで全形を窺えるものはない。

**横 瓶** 俵形の胴部に短い口頭部が付いたもの。3 点が確認され、全て図示した。なお、拓本による外面の表示は、上から断面→外面→内面の順で配置してある。

**甕** 口径 20cm を越える大型品である。破片資料ばかりで全形を窺えるものはない。頸部に波状文を施すのみが認められた。なお、拓本による内外面の表示は、実測図の表現方法にならい、左から外面→内面→断面の順で配置してある。

## 土 師 器

食膳具と煮炊具から構成され、無台椀・小型甕・鍋・高杯が認められる。

**無台椀** 法量から 3 種に分類するが、出土数が少ないと認められ、あくまで図化できた個体に対して行う。I は口径 13.5cm 以上・器高 4.5cm のもの、II は口径 12.5~13cm・器高 3.5~4cm のもの、III は口径 11.5cm 以下・器高 3cm 前後のものである。III は特に身が浅く、皿とすべきであるが便宜上ここに含める。

**甕** 大型と小型の別がある。大型品は口径 25cm を越えるもの、小型品は口径 15cm 以下のものとする。

大型・小型の別に関わらず口頭部形態には A・B の 2 種がある。A は頸部から緩やかに外傾しながら立ち上がり、口縁部で直立気味となる。B は頸部で強く外折して口縁部にいたるものである。全てロクロ成形によるもので、非ロクロのものは確認していない。

**鍋** 1 例のみ確認された。器壁が厚く、口縁端部は面取りされて有段状をなす。内外面ともにカキメ調整を施す。

## 黒 色 土 器

内面に炭素を吸着させて黒色化したもので、無台椀・有台椀がある。外面にも黒色処理が施された例は確認されなかった。

**高 杯** 脚部が 1 点だけ確認された。

## B 遺構出土遺物（図版 7~9、図版 19~22）

**SX12**（図版 7-1 ~ 16、図版 19） 本遺跡で最も大きな土坑の覆土中から比較的多くの遺物が出土した。特に土師器煮炊具が多く、遺跡から出土した土師器煮炊具のほとんどを本遺構出土例が占める。須恵器蓋（1~3）、有台杯（4~5）、無台杯（6~8）、甕（9~10）、土師器小型甕（11~14・16）、大型甕（15）がある。須恵器食膳具は破片資料が多く、全形を窺えるものがほとんどない。杯の底部切り離し痕は 7 が糸

切りである他は全てヘラ切りである。土師器煮炊具は器面の摩滅が著しく、調整痕は不明瞭である。全て口クロ成形によるものであるが、14は外面の指オサ工痕が残されたままで凹凸が明瞭である。また14・16はスス・コゲの付着が頗著で、特に16は被熱による器面の剥落が激しい。

**SK21** (図版7-17~24、図版19) 主要な器種には須恵器杯蓋B II (18)・杯蓋III (17)・有台杯 (20)・無台杯B II (19)・横瓶 (24)、土師器無台杯II (21・22)・黒色土器無台杯 (23)がある。細片が多く、実測可能個体は全て図化した。19は覆土中から完形のまま出土した(写真8)もので、胎土の特徴から佐渡小泊産と推定される。器面は強いナデによる凹凸が激しく、底面はヘラ切り離し後未調整のため、粘土のまくれがそのまま残されている。20は底部内面が広く平滑になっており、硯に転用された可能性がある。平滑面は断面にまで及ばない。土師器椀は総じて器面の摩滅が著しいが、22は内面の丁寧なナデの様子が良く残っている。

**P25** (図版7-25、図版19) 土師器小型甕の底部片が1点のみ出土した。底面には糸切り痕が明瞭に残る。

**SX13** (図版7-26、図版19) 須恵器杯蓋A IIの破片が1点のみ出土した。

**SD111** (図版7-27、図版19) 横瓶の破片1点が出土した。すでに第IV章で触れたように、本遺構は近世に下る可能性がある。

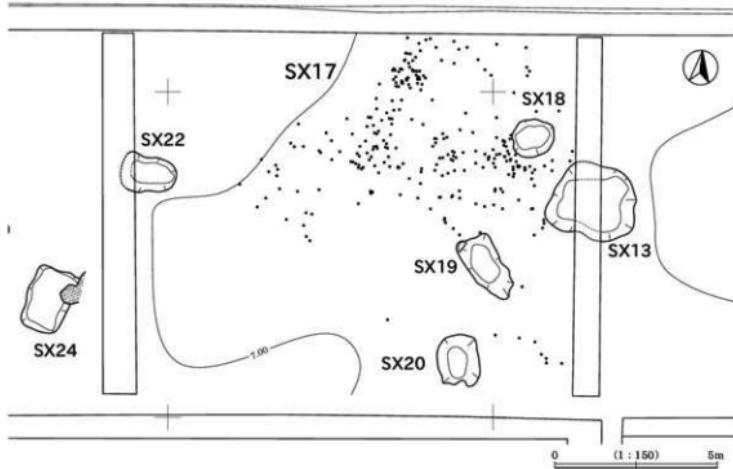
**SD1** (図版7-28~31、図版19) 須恵器有台杯 (28)・無台杯II (29)、土師器無台椀I (31)・無台椀III (30)がある。SD1は遺跡を横断する自然流路で、新流路に落ち込んだII層から28が、旧流路の7層から29・30、8層から31がそれぞれ出土した。29は白味がかった淡灰色を呈し、胎土は緻密で器壁も薄く、他の須恵器に比して精良な感がある。また、口縁直下を強くナデ調整した結果、短く外反する口縁部が作り出されている点も特徴的である。30・31は共に遺存状態が比較的良好な土師器食膳具で、30は法量的に皿に器種分類したほうが適当であろう。30は内面の他に、口縁外側の2か所に小範囲のススの付着が認められる。灯明の芯の痕跡かも知れない。また31の外面には薄いススの上に点状にタール状付着物が認められる。またススのため不明瞭ではあるものの、体部外面には「十」の墨書が確認できる。30は器面摩滅のため底部切り離し痕が不明だが、31は糸切り痕が明瞭で、切り離し時に生じた粘土が外側にはみ出した結果、高台状の高まりを底面に形成している。

**SX19** (図版7-32~35・図版19) 13基検出された人為的埋土坑のうち、唯一本遺構から実測可能な遺物が出土した。須恵器杯蓋II (33)・有台杯A (34)・大型甕 (35)がある。どれも小破片であり、土坑埋め戻し時の混入であることが窺われる。

**SX17** (図版8-36~9-109・図版19~21) 特定の地区から多量の遺物が集中して出土したことから、遺構に準じて取り扱うこととする。すでに第IV章で触れたように、人為的埋土坑と検出面において上下関係にあり、SX17の下位から人為的埋土坑(SX18・19)を検出した(第11図)。本遺構から出土した土器を口縁部計測法により残存率を集計したところ、須恵器食膳具が98.8%と圧倒的多数を占め、土師器食膳具・貯蔵具・煮炊具共に極端に少ない結果となった(第3表)。破片数計測法の併用などによる検証作業を行っていないため、この結果が実態をどれほど反映したものかは不明と言わざるを得ない。しかし、SX12で土

種類	器種	口縁部 残存率/36 (残存率)	比率
須恵器	杯 蓋	278	41.1%
	有台杯	288	42.6%
	無台杯	102	15.1%
須恵器食膳具	計	668	98.8%
土師器	無台椀	0	0.0%
黒色土器	無台椀	1	0.1%
土師器食膳具	計	1	0.1%
食 薪 具	計	669	98.9%
須恵器	長 瓶	1	0.1%
	甕	0	0.0%
貯 藏 具	計	1	0.1%
土師器	長 瓶	0	0.0%
	小 瓶	6	0.9%
	甕	1	0.1%
煮 炊 具	計	7	1.0%
總 計		677	100.0%

第3表 SX17出土土器器種構成比率



第11図 SX17（遺物集中区）検出状況

師器煮炊具がまとまって出土した以外は、遺跡全体を通して煮炊具・貯蔵具が少なく、調査区の性格を反映した土器組成の可能性が高いと考えている。本遺構から出土した主な器種には、須恵器杯蓋B II (36~39・47~51)・杯蓋A II (42~44)・杯蓋I (52)・有台杯A I (53~64)・有台杯A II (65~68)・有台杯B (69・91~93)・無台杯I (74~77)・無台杯II (78~83)・無台杯III (84~86・89)・長頸瓶 (96)・横瓶 (97)・甕 (94~95)・土師器無台杯 (98)・小型甕 (102~104)・大型甕 (105)・鍋 (107)・黒色土器 (99・101)などがある。須恵器食膳具の底部切り離し痕をみると、有台杯61・63・65・69、無台杯77・82・84・85・87・89が糸切りである他は全てヘラ切りで、後者が主体を占める。また糸切り底の杯には、底部から体部の立ち上がりが角ぼったり (61・65・69など)、小さい底部からの立ち上がりが直立気味になる (84など)といった形態的特徴を指摘することができる。70~73は円盤状に加工された有台杯の底部片である。破断面には折り取ったような剥離のほかに、輪積みの接合部で外されたような痕跡が認められる。72の内面では研磨を受けたような平滑さが目立つが、他の資料には、やや滑らかさが感じられるものの際立った平滑さは認められない。形態的に転用窓の可能性を当初は想定したが、口縁部まで描った有台杯と比べた結果、72を除き、平滑さに明瞭な違いを確認することができなかった。全ての資料で墨痕も認められない。なお、72の破断面は折り取られたままで、研磨が及んだような痕跡は認められない。2点出土した黒色土器のうち、99は内面のミガキが顕著で、光沢を持ち、工具痕も明瞭である。一方101は遺存状態が悪く、炭素の吸着により黒色化しているものの、本来の器面はすでに失われているらしい。108はヘラで、109は墨で「十」が底面に記されている。ヘラ記号のある土器は108のみであるが、墨書土器は遺跡から3点出土しており全て「十」と書かれている。102・103は細片であるが、遺跡全体を通して煮炊具が少ないと意識的に抽出のうえ図化した。口縁部形態は共にAである。105は内外面共にカキメを有する土師器甕であるが、実測図の表現方法にならい左側に外面、右側に内面の拓本を配置した。

### C 包含層出土遺物 (図版10~11・図版22)

主要な器種には、須恵器杯蓋I (111~112)・杯蓋B I (113)・杯蓋B II (114~115)・杯蓋B III (116)・杯蓋B (117~118)・有台杯A I (119~123)・有台杯A II (124~125)・有台杯B (127~128)・無台杯I (130)・無台杯II (131)・無台杯III (132~133)・長頸瓶 (134~137)・横瓶 (138)・大型甕 (139~141)、土師器甕 (143~146)・高杯 (147)・黒色土器無台碗 (142)などがある。129は並行する沈線を2条体部にめぐらすもので、金属器模倣杯である。2条の沈線に挟まれた部分が強くナデ調整されており、内面に特徴的な凹みを生じている。その結果、外面では1条目の沈線を境界としたわずかな段差が形成され、沈線間が低い凸帶のように見える。122の底面には、かなり薄くなってしまっているものの、かすかに「十」の墨書きが見える。126の底面には刻線が1条見られるのみで、交差する線はない。また「十」の刻線が認められた108とは、線の幅や書き方において明らかに違いを指摘することができる。

150・151は近世の井戸に混入した須恵器で、150はヘラ切り調整が明瞭な無台杯の底部辺、151は大型甕の胴部破片である。

## 3 その他の遺物

### A 縄文土器 (図版9-106・図版21)

SX17で平安時代の遺物に混入して出土した深鉢の底部片である。本遺跡で唯一の縄文土器であるため、1点の破片ではあるもののあえて掲載することとする。大粒の砂粒を大量に含み、器面は摩滅により調整痕が見えない。内面には、底部と胴部の接合痕が明瞭で、それによれば、厚さ7mmほどの比較的薄い粘土板の上に、厚さ1cmほどの粘土組を直接接合していることが分かる。また内面には一見ナデのような筋状の擦痕が認められる。底部径は推定8cmである。詳細な帰属時期を明確に判断することができないものの、砂粒を多く含む胎土・器壁の厚さ・底部の製作技法・色調などの特徴から、縄文時代後期中葉以降に位置づけられる可能性が高い。

### B 近世陶器 (図版11-152~153・図版22)

SE110から出土した一括資料である。152は肥前系陶器の皿である。見込みと高台疊付に砂目積みの痕跡が残り、砂目は高台の外側にまで及ぶ。低く幅広の高台は露胎で、施釉は見込み全面と外側の1部で認められる。砂目積み痕の特徴から、大橋康二氏の編年【大橋1993】のⅡ期：17世紀前半に位置づけることができる。153は須佐唐津と推測される擂鉢(相羽重徳氏教示)で、接合しないものの同一個体破片がもう1点出土した。胎土は肌色に近い淡い褐色で、長石を含み軟質である。胴部はナデによる凹凸があり、内外面にススの付着が顕著である。新潟県内の遺跡では、17世紀後半から須佐唐津の擂鉢の出土が顕著になる【安藤1999】とされることから、共伴した肥前系陶器との編年対比が課題となろう。

### C 石器 (図版9-110・11-149・図版22)

110は、SX17から平安時代の土器に伴って出土した安山岩製の凹石である。敲打痕の集合による2か所の凹みが片面のみに認められるが、表面の風化が著しい。同じSX17からは縄文後期中葉以降の土器片

が出土していることから、縄文時代に帰属する石器と判断した。149は凝灰岩製の砥石で、3面に鋭い線状の擦痕が認められる。撥形をなし、側面の断面形が緩やかに窪むのが特徴的である。これらの特徴から鉄器用の砥石と判断し、平安時代に帰属するものと考えている。

#### D 木 製 品 (図版11-148・154~155・図版22)

全て近世に帰属するものと思われる。148はII層中からの出土で、内外異なる塗彩を施した漆椀である。口縁～体部破片で、外面に黒漆、内面に赤漆が認められる。木取は横木取で、樹種はブナ属と同定された。154～155は、井戸：SE110から近世陶器と須恵器に伴って出土した。154は白木の椀で塗彩が認められない。底部が厚く作り出され、また器壁も比較的厚手であることから未完成品の可能性がある。横木取で、樹種はブナ属と同定された。155は連巻式の下駄で、先端部が一部欠損するものの遺存状態は比較的良好であり、鼻緒をとめた穴が3か所確認できる。木取は板目取で、樹種はヒノキと同定された。

# 第VI章 自然科学分析

## 1 古環境及び遺構の用途

パリノ・サーヴェイ株式会社

### A はじめに

新潟県上越市大字戸野目古新田に所在する屋敷割付遺跡は、高田平野を流れる関川右岸の沖積地に立地し、本遺跡東側には関川の支流である戸野目川が流れる。発掘調査の結果、古代及び近世の遺構・遺物が確認されており、これらの状況から古代（9世紀前半）を主体とする遺跡と推定されている。

本報告では、本遺跡の発掘調査成果から課題とされた、1) 古植生、2) 遺構の用途、3) 木材利用、といった3点を検証するため自然科学分析調査を実施する。

### B 試 料

試料は、遺構覆土から採取された土壤試料、種実遺体、木製品からなる。以下に、各試料の概要を記す。

#### 1) 土 壤 試 料

試料は、3基の遺構（SK21・SX23・SX29）覆土から柱状ブロックで採取された土壤3点である（第12図）。調査所見によれば、SK21は、平面が不整形形を呈し、浅い掘り込みからなる土坑である。覆土は、暗緑灰色粘質シルト（1層）、暗オリーブ灰色粘質シルト（2層：SK21①）、オリーブ灰色粘質シルト（3層：SK21②）に分層されており、本遺構からは平安時代の土器が大量に出土している。また、SX23・SX29は、後述するSX18とともに不定形な土坑であり、覆土の堆積状況から埋め戻しの可能性が示唆されているが、その性格や機能については不明とされている。試料の観察所見によれば、SK23は、上部から亜角状（最大径2~3cm）の灰色シルトの偽縛が多量に混じる黒褐色シルト～粘土（SX23①）、亜角～亜円状（径約0.5~1cm）の灰色シルトの偽縛が混じる黒褐色シルト～粘土（SX23②）、亜角状（径10cm以上か）の灰色シルトの偽縛からなる土層（SX23③）、灰色粘土（SX23④）からなる。一方、SX29は、亜角～亜円状（径約10cm）の灰色シルトの偽縛からなる土層（SX29①）、亜円状（径約1cm前後）の灰色シルト



第12図 分析試料及び試料採取位置

トの偽縛が混じる黒褐色シルト～粘土 (SX29②)、灰色を呈する極細粒砂混じりの粘土 (SX29③) からなる。

分析試料は、上記した試料の観察所見及び調査担当者の指示に基づき、SK21 2層 (SK21①)、SX23 (SX23②)、SX29 (SX29②) を選択・採取した土壌3点である（第12図）。

## 2) 種実遺体

試料は、2基の遺構 (SX18・SX23) 覆土より、水洗選別（最小筛目1mm）によって得られた種実遺体である。それぞれ、遺構別にフィルムケースに収納された状態にある。

## 3) 木製品

木製品は、近世の所産と考えられる下駄1点 (SE110)、漆器椀2点 (SE110, 9E II層) の計3点である。

以上の試料のうち、土壌3点を対象に花粉分析、前述の土壌試料及び水洗選別によって得られた種実遺体を対象に種実遺体同定、木製品を対象に樹種同定を行う。

# C 分析方法

## 1) 花粉分析

試料10ccを正確に秤り取り、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9、濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類を対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料ではこの限りではない）。

なお、単位面積あたりの花粉総数を算出するためには、対象とする土壌の堆積速度を求める必要がある（例えば【Moore and Webb 1978】など）。本分析試料は、遺構覆土であり堆積速度を求ることは困難であったことから、単位容積(1cc)あたりの花粉総数（不明花粉を含む）を算出している。この際、有効数字を考慮し、10の位を四捨五入して100単位に丸めている。結果は同定・計数結果の一覧表、および花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基準として、百分率で出現率を算出し図示する。

## 2) 種実分析

土壌試料200ccを水に没し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な種実を抽出する。抽出した種実は、双眼実体顕微鏡下で観察し、現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等との対照から種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、ハイフオンで結んで表示する。分析後の種実は、種類毎に容器に入れ、保管する。土壌試料から抽出した種実は70%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施す。

### 3) 樹種同定

各木製品の外観及び木取を観察した後、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製する。芯持丸木など3断面の切片作成が困難な木製品については、接合面や破損部を利用して数mm角の木片を採取し、木片から3断面の切片を作成する。切片は、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、各樹種の木材組織配列の特徴については、林（1991）、伊東（1995,1996,1997,1998,1999）や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

## D 結 果

### 1) 花粉分析

結果を第4表、第12図に示す。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものと示す。なお、木本花粉总数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるため、出現した種類を+で表示するに留めている。以下に各試料の症状を記す。

#### SK21

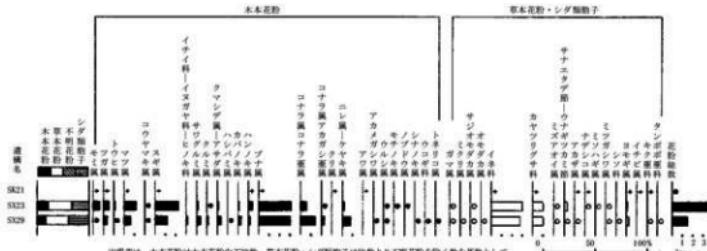
花粉化石の産出状況が悪く、定量解析の際に有意とされる個体数は得られなかった。わずかに検出された花粉も保存状態は不良であり、花粉外膜が溶解・破損しているものが多く認められた。検出された花粉は、木本花粉ではツガ属、マツ属、スギ属、ハンノキ属、ブナ属等、草本花粉では、イネ科、ナデシコ科、ヨモギ属、キク亜科等が認められる。花粉总数は、約100個/ccである。

#### SX23・SX29

2試料からは花粉化石が豊富に産出し、花粉群集も類似する。いずれも草本花粉の割合が高く、イネ科が多產し、次いでカヤツリグサ科が多く産出する。この他に、サナエタデ節ーウナギツカミ節、ヨモギ属、水湿地生植物であるガマ属、ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属、ミツガシワ属等の花粉が認められる。一方、木本花粉では、ブナ属が最も多く産出し、モミ属、ツガ属、マ

種類	試料番号	SK21	SX23	SX29
木本花粉				
モミ属		1	15	2
ブナ属		2	13	8
ツバキ属		—	4	2
マツ属（裸果）		1	10	3
マツ属（不育）		3	16	10
コウヤマキ属		—	2	1
スギ属		2	51	24
イネ科-ヒメイグサ科-ヒノキ科		—	—	3
サワグルミ属		—	4	8
クルミ属		—	1	3
クマツデ属-アサダ属		—	3	7
ハシバミ属		—	—	1
カバノキ属		—	3	7
ハツカニ属		5	10	4
ブチ科		5	70	60
コナラ属コナラ属		—	13	29
コナラ属アガシ属		—	2	6
クリ属		1	—	—
ニレ科-ケヤキ属		—	5	17
ツブノ属		1	—	—
アカガシガシ属		—	—	1
ウルシ属		—	1	1
モミジ属		—	—	—
ノブタケ属		—	1	—
シナノキ属		—	—	1
ウコギ科		—	—	—
トネリコ属		—	—	1
草本花粉				
ガマ属		—	1	9
ミクリ属		—	—	4
サジオモダカ属		—	6	5
オモダカ属		—	—	6
イネ科		20	309	342
カヤツリグサ科		1	101	124
ミズアオイ属		—	1	10
サナエタデ節-ウナギツカミ節		—	32	9
アサダ科		1	—	1
ナデシコ科		1	1	—
ミツガシワ属		—	3	—
ミツガシワ属		—	1	2
ソシ科		—	—	1
ヨモギ属		1	12	28
イチニ属		1	—	—
モクシ科		1	—	1
タケノコ科		—	—	1
不明花粉		6	14	11
シダ類孢子		53	331	468
シダ類孢子		53	331	468
合計		21	225	300
木本化石		50	497	500
草本化石		6	14	11
不明花粉		53	331	468
總計（不明を除く）		100	1,023	1,251
1ccあたりの平均花粉数（不明を含む）(個)		100	38,100	16,100

第4表 花粉分析結果



第13図 各遺構の花粉化石群集

ツ属、スギ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属等を作り。花粉总数は、SX23は約38,100個/cc、SX29は15,100個/ccである。

## 2) 種実遺体分析

結果を第5表に示す。土壤試料及び水洗選別済み(単体)試料からは、草本16分類群2652個の種実が検出され、栽培植物のイネの炭化胚乳がSX23から1個、炭化穀がSK21から17個、SX23から1個、アワヒエの炭化胚乳がSK21から1個確認された。栽培植物以外では、多量のウキヤガラ近似種をはじめ、ミクリ属、ヘラオモダカ、オモダカ属、オモダカ科、ホタルイ属(一部)、イボクサなどの水生植物が確認された。この他に、木材、炭化材、昆虫、高師小僧(褐鉄鉱)が確認された。以下に試料別検出状況、及び種実の記載を記す。

### ① 遺構別の種実検出状況

#### ・ SK21 (土壤試料)

栽培植物のイネの炭化穀が17個、アワヒエの炭化胚乳1個、炭化材0.04gが検出された。

分類群	部位	状態	SX21 土壤200cc (329.2g)	SX18 単体	SX23 土壤200cc (315.7g)	単体	SX29 土壤200cc (262.2g)
ミクリ属	葉実	-	-	-	-	-	1
ヘラオモダカ	葉実	-	-	-	-	-	5
オモダカ属	葉実	-	-	-	-	-	14
オモダカ科	種子	-	-	-	1	-	40
イネ	胚乳	炭化	-	-	-	1	-
	胚乳	炭化	17	-	-	1	-
アワヒエ	胚乳	炭化	1	-	-	-	-
ホタルイ属	葉実	-	-	1	-	-	4
ウキヤガラ近似種	葉実 完形	-	473	29	1850	58	-
	葉片	-	11	17	58	-	-
カヤツリグサ科	葉実	-	-	-	44	14	-
イヌクサ	種子	-	-	-	-	1	-
イヌクサ科	葉実	-	-	-	-	-	1
タガ属	葉実	-	-	-	1	-	-
キジムシロ属-ヘビチゴ属-オランダイチゴ属	根	-	-	2	-	-	-
マメ科	葉実 葉片	-	-	-	-	1	-
オトギリソウ属	種子	-	-	-	-	5	-
シキミ属	葉実	-	-	-	-	1	-
木材	-	-	-	-	-	-	1
炭化材	0.04g	-	3 (<0.01g)	-	3 (<0.01g)	-	-
昆虫	-	-	2	-	-	11	-
高師小僧(褐鉄鉱)	-	-	-	-	10 (<0.02g)	-	-

第5表 種実分析結果

## ・ SX18 (単体試料)

ウキヤガラ近似種484個が検出された。

## ・ SX23 (土壤・単体試料)

土壤試料からは、オモダカ科1個、ホタルイ属1個、ウキヤガラ近似種46個、キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属2個、炭化材3個(0.01g未満)、昆虫2個が検出された。単体試料からは、ウキヤガラ近似種1908個、カヤツリグサ科44個、タデ属1個と、栽培植物のイネの炭化胚乳1個、炭化穎1個が検出された。

## ・ SX29 (土壤試料)

ミクリ属1個、ヘラオモダカ5個、オモダカ属14個、オモダカ科40個、ホタルイ属4個、ウキヤガラ近似種58個、カヤツリグサ科14個、イボクサ1個、イラクサ科1個、マメ科1個、オトギリソウ属5個、シロネ属1個、炭化材3個(0.01g未満)、木材1個、昆虫11個、高師小僧10個(0.02g)が検出された。

## (2) 種実の記載

検出された種実の状態は比較的良好であり、栽培植物のイネの胚乳・穎、アワーヒエの胚乳に炭化が認められた。以下に、検出された種実の形態的特徴等を記す。

・ ミクリ属 (*Sparganium*) ミクリ科

果実が検出された。淡灰褐色、挾倒卵形。長さ3.5mm、径2.5mm程度。頂部はやや尖り、基部は切形。果皮はスponジ状で表面には数本の隆条が縱列する。

・ ヘラオモダカ (*Alisma canaliculatum* A. Br. et Bouche) オモダカ科サジオモダカ属

果実が検出された。淡灰褐色、楕円形で偏平、基部は切形。長さ2.5mm、幅1.5mm程度。背部に深い縦溝が1本走る。果皮はスponジ状で柔らかく、中の種子が透けてみえる。種子は茶褐色、倒U字状に曲がった円柱状で偏平。径1mm程度。種皮は薄い膜状で柔らかく、表面には縦長の微細な網目模様が配列する。

・ オモダカ属 (*Sagittaria*) オモダカ科

果実が検出された。淡黄褐色、倒卵形で偏平。径3mm程度。果皮は薄く翼状。翼の外形は欠損する。表面は微細な網目が縦方向に並ぶ。果皮は透き通るため、中の種子が透けてみられる。種子は茶褐色、倒U字状に曲がった円柱状で偏平。径1mm程度。種皮は薄い膜状で柔らかく、表面には縦長の微細な網目模様が配列する。

## ・ オモダカ科 (Alismataceae)

種子が検出された。淡褐色、倒U字状に曲がった円柱状で偏平。長さ2mm、幅1mm程度。種皮は膜状で薄くやや透き通り柔らかい。表面には微細な網目があり縦筋が目立つ。

・ イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

胚乳と穎(果)が検出された。炭化しており黒色を呈す。長楕円形でやや偏平。胚乳は長さ4.3mm、幅3mm、厚さ1.5mm程度。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2-3本の隆条が縦列する。穎の破片は、基部の斜切状円柱形の果実序柄部分で大きさ1-2mm程度。果皮表面には顆粒状突起が縦列する。

・ アワーヒエ (*Setaria italica* (L.) P.Beauv.- *Echinochloa utilis* Ohwi et Yabuno) イネ科エノコログサ属-ヒエ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色、広卵形でやや偏平。長さ1.3mm、幅1mm程度。背面は丸み

があり、腹面は平ら。基部正中線上に胚の凹みがある。表面はやや平滑で、頸(果)の付着は認められなかつた。

・ホタルイ属 (*Scirpus*) カヤツリグサ科

果実が検出された。黒褐色、片凸レンズ状の広倒卵体。長さ 2.2mm、径 1.7mm 程度。果実頂部は尖る。背面はやや高く正中線上に稜がある。基部から逆刺を持つ匙状の腕が伸びる。果皮表面は光沢があり、不規則な波状の横皺状模様が発達する。

・ウキヤガラ近似種 (*Bolboschoenus cf. fluvialis* (Torr.) T.Koyama subsp. *yagara* (Ohwi) T.Koyama)

カヤツリグサ科ウキヤガラ属

果実が検出された。黒褐色、長さ 3-3.5mm、径 1.5-2mm 程度の三稜状倒卵体。稜に沿って基部から 3 裂しやすく、1/3 の破片もみられる。頂部の柱頭部分はわずかに伸び、基部は切形。両端の断面は 3 角形。果皮表面は粗面。

・カヤツリグサ科 (Cyperaceae)

果実が検出された。ホタルイ属、ウキヤガラ近似種以外の形態上差異のある複数種を一括した。淡黒褐色、レンズ状または三稜状倒卵体。径 1-3mm 程度。頂部の柱頭部分はやや伸びる。基部は切形で花被片が伸びる個体もみられる。果皮表面は平滑-微細な網目模様がある。

・イボクサ (*Aneilema keisak* Hassk.) ツユクサ科イボクサ属

種子が検出された。灰褐色、半横長楕円体。長さ 1mm、径 2mm 程度。背面は丸みがあり、腹面は平ら。臍は線形で腹面の正中線上にあり、胚は一側面の浅い円形の凹みに存在する。種皮は柔らかく、表面は円形の小孔が散在する。

・イラクサ科 (Urticaceae)

果実が検出された。淡黄褐色、非対称な広倒卵形で偏平。径 1.2mm 程度。頂部や基部は尖り、中央部は両凸レンズ形。果皮は薄く表面はざらつく。

・タデ属 (*Polygonum*) タデ科

果実が検出された。黒褐色、長さ 3mm、幅 1.8mm 程度の背面正中線上に鈍稜のある広卵体。果皮表面には明瞭な網目模様が発達する。

・キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属 (*Potentilla* - *Duchesnea* - *Fragaria*) パラ科

核(内果皮)が検出された。形態上差異のある複数種を一括した。淡灰-黒褐色、腎形でやや偏平。径 1.1mm 程度。内果皮は厚く硬く、表面は粗面。

・マメ科 (Leguminosae)

果実(節果)の破片が検出された。灰褐色、大きさ 5mm 程度の長方形で偏平。縁には筋がある。表面は粗面。クサネム属クサネム (*Aeschynomene indica* L.) の果実に似る。

・オトギリソウ属 (*Hypericum*) オトギリソウ科

種子が検出された。黒褐色、線状長楕円体。両端は短い突起状。長さ 1.2mm、径 0.6mm 程度。種皮は微細で横長の凹点による網目模様が配列する。

・シロネ属 (*Lycopus*) シゾ科

果実が検出された。灰褐色、三稜状広倒卵体。長さ 2mm、径 1mm 程度。背面は平らで、両側にある幅 0.3 ~ 0.4mm 程度の淡褐色、スポンジ状の翼を欠損する。腹面正中線上は鈍稜をなし、基部は切形で長楕円形の臍がある。

### 3) 樹種同定

結果を第6表に示す。本製品は、針葉樹1種類（ヒノキ）と広葉樹1種類（ブナ属）に同定された。

以下に、各種類の解剖学的特徴等を記す。

#### ・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と柔細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～10細胞高。

#### ・ブナ属 (*Fagus*) ブナ科

散孔材で、道管は単独または放射方向に2～3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は單穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織は同性、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

### 4) 考察

#### ① 古植生

遺構覆土から採取された土壤3試料のうち、SX23・SX29からは花粉が豊富に産出し、保存状態も比較的良好であった。広域の植生を反映する木本類では、ブナ属が最も多く産出し、モミ属、ツガ属、マツ属、スギ属、コナラ属コナラ亞属、ニレ属ニケヤキ属等が伴う組成を示しており、花粉が僅かに検出されたSK21においても同様の分類群が検出された。最も多く産出したブナ属は、コナラ亞属等とともに冷温帶性落葉広葉樹林の主要構成要素であり、ニレ属ニケヤキ属は、サワグルミ属やクマシデ属アサダ属、ハンノキ属等とともに、河畔や低湿地等の過湿地を好む種を含む分類群である。このことから、後背の山地・丘陵部には、ブナ属を主体とした落葉広葉樹林が分布し、部分的にスギ属やモミ属、ツガ属等の針葉樹も林分を形成していたと推測される。また、関川や周辺の河川沿い等の河畔や低湿地には、ニレ属ニケヤキ属、ハンノキ属等が生育していたと考えられる。スギ属も低地に存在した可能性がある。なお、本遺跡の北東約1kmに位置する三角田遺跡（上越市）における分析調査においても、8世紀初頭～中世にかけてブナ属とハンノキ属が多産する結果が認められており、同様の落葉広葉樹林や低湿地林の存在が指摘されている〔パリノ・サーヴェイ株式会社2006〕。

一方、周辺の植生を反映する草本類では、イネ科が多産し、カヤツリグサ科、サナエタデ節ウナギツカミ節、ヨモギ属等の花粉が検出されたほか、カヤツリグサ科、タデ属、マメ科、オトギリソウ属等の種実も検出された。これらは開けた場所に草地を形成する人里植物に属する分類群を多く含むことから、遺跡周辺は開けた環境であり、これらの草本類が生育する草地等が分布していたと考えられる。また、ガマ属、ミクリ属、ヘラオモダカ（サジオモダカ属）、オモダカ属、ホタルイ属、ウキヤガラ（近似種）、イボクサ、ミズアオイ属、ミツガシワ属等の水湿地生植物に由来する花粉や種実も検出されており、これらは周辺の河道や湿地等に生育していた個体に由来すると考えられる。

地区	位置	遺構	層位	器種	本取	標種
東区	Dトレンド	SE110		下駄（通商）	板目	ヒノキ
	26B14	SE110		漆器碗	楓木取	ブナ属
	9E	II層		漆器碗	楓木取	ブナ属

第6表 樹種同定結果

## ② 遺構の用途

花粉分析を実施した遺構のうちSK21からは花粉化石がほとんど検出されず、1ccあたりの花粉総数も約100個程度と少なかった。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている〔中村1967；徳永・山内1971；三宅・中越1998など〕。検出された花粉化石の保存状態が悪かったこと等を考慮すると、堆積時に取り込まれた花粉・シダ類胞子がその後の経年変化により分解・消失したこと等が推定される。

土壤の観察所見ではSK21は、観察範囲内では見かけ上塊状を為す灰色シルトからなる。SX23・29は、土色から比較的腐植が多いことが推定され、さらに、黒褐色シルト～粘土は無数の偽根から構成されており、覆土の母材となる堆積物の由来や堆積環境が異なる状況が窺われる。また、土壤試料及び単体試料から検出された種実の産状に着目すると、SK21・SX23からは、胚乳が食用とされる栽培植物のイネやアワーヒエが確認され、これらの中に炭化した個体も認められた。これらの栽培植物が検出されたことから、当該期におけるこれらの植物質食糧の利用や、利用時に被熱を受けたこと等が推定される。一方、SX18・SX23・SX29からは、カヤツリグサ科（ウキヤガラ近似種を含む）が多量検出されるなど特異な産状が認められ、その検出状況は単体試料と洗出試料ともに同様の傾向を示した。

以上の結果、各遺構の用途や性格を指摘するに至らないが、SK21とSX18・SX23・SX29については、発掘調査所見や堆積物の状況、花粉化石の産状から、覆土の母材となる堆積物の由来や堆積環境を反映している可能性がある。すなわち、SK23・29については、当時の表層土（地表面）が埋め戻しに用いられていたとすれば、比較的近傍の植生を示していると考えられ、多量検出されたカヤツリグサ科（ウキヤガラ近似種を含む）やオモダカ科等は土壤とともに混入した個体由来する可能性もある。一方、SK21については、前述した遺構と堆積物と由来が異なること、栽培植物の炭化種実や炭化物が主体となるといった特徴が指摘される。

## ③ 木材利用

下駄（連歛下駄）や漆器椀等の木製品からは、針葉樹のヒノキと広葉樹のブナ属の2種類が認められた。下駄に認められたヒノキは、木理が直通で割裂性が高く、加工が容易で耐水性が高い材質を有する種類であり、漆器椀に認められたブナ属は、やや重硬であるが、加工は容易とされる種類である。

新潟県内における近世の下駄を対象とした調査事例では、六百地遺跡（神林村）の連歛下駄2点（モクレン属）、天王前遺跡（神林村）の連歛下駄破片（モクレン属）、高田遺跡（神林村）の連歛下駄（スギ）、石川遺跡（神林村）の差歛下駄台（モクレン属）等が挙げられ〔パリノ・サーヴェイ株式会社2002a・2002b・2003a・2003b〕。これまでのところヒノキの利用は確認されていない。ただし、中世の下駄の調査事例では、寺地遺跡（青海町）や大武遺跡（和島村）から出土した連歛下駄にヒノキが認められている〔松葉2000；植田2002〕。

漆器椀に認められたブナ属は、漆器の本地としてトチノキやケヤキと共に最もよく利用される樹種の一つである。近世の漆器椀の調査事例では、元屋敷遺跡（見附市）でサクラ属と共にブナ属が確認されている〔沙見・岡田2005〕。なお、ブナ属を本地とする漆器椀・皿は、県内の古代以降の遺跡（例えば、蔵ノ坪遺跡（中条町）、大武遺跡（和島村）、八反田遺跡（上越市）、仲田遺跡（上越市）。下沖北遺跡（柏崎市）など）から確認されていることから、ブナ属は古くより漆器椀・皿の本地として利用されていた種類と言える。

## 引用文献

- 林 昭三 1991 『日本産木材 顕微鏡写真集』 京都大学木質科学研究所
- 石川茂雄 1994 『原色日本植物種子写真図鑑』 石川茂雄図鑑刊行委員会 p.328
- 伊東隆夫 1995 『日本産広葉樹材の解剖学的記載I』『木材研究・資料』31 京都大学木質科学研究所 p.81-181
- 伊東隆夫 1996 『日本産広葉樹材の解剖学的記載II』『木材研究・資料』32 京都大学木質科学研究所 p.66-176
- 伊東隆夫 1997 『日本産広葉樹材の解剖学的記載III』『木材研究・資料』33 京都大学木質科学研究所 p.83-201.
- 伊東隆夫 1998 『日本産広葉樹材の解剖学的記載IV』『木材研究・資料』34 京都大学木質科学研究所 p.30-166
- 伊東隆夫 1999 『日本産広葉樹材の解剖学的記載V』『木材研究・資料』35 京都大学木質科学研究所 p.47-216.
- 株式会社パレオ・ラボ 2002 「木製品の樹種同定」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第110集 北陸自動車道上越春日・木田地区発掘調査報告書Ⅶ 八反田・高畠遺跡』 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 p.49-52
- 松葉礼子 2000 「大武遺跡出土木製品の樹種同定」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第97集 一般国道116号和島バイパス関係報告書1 大武遺跡I (中世編)』 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 p.42-47
- 三村昌史・植田弥生 2003 「仲田遺跡出土木製品の樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第128集 北陸新幹線関係発掘調査報告書II 仲田遺跡』 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 p.69-71
- 三宅 商・中越信和 1998 「森林土壤に堆積した花粉・胞子の保存状態」『植物史研究』6 p.15-30
- Moore, P. D. and Webb, J. A. 1978 An Illustrated Guide to Pollen Analysis. HODDER AND STOUGHTON.
- 中村 純 1967 『花粉分析』古今書院 p.232
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志 2000 『日本植物種子図鑑』 東北大学出版会 p.642
- バリノ・サーヴェイ株式会社 2002a 「六百地遺跡の自然化学分析」『神林村埋蔵文化財報告第13 六百地遺跡』 神林村教育委員会・山武考古学研究所 p.13-42
- バリノ・サーヴェイ株式会社 2002b 「山屋遺跡群の自然化学分析」『神林村埋蔵文化財報告第15 山屋遺跡群 前坪遺跡・銅鉄遺跡・ヶヶ田遺跡・天王前遺跡・水口沢遺跡』 神林村教育委員会・山武考古学研究所 p.17-38
- バリノ・サーヴェイ株式会社 2002c 「蔵ノ坪遺跡から出土した木製品の樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第115集 一般国道7号中条黒川バイパス関係発掘調査報告書 蔵ノ坪遺跡』 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 p.45-59
- バリノ・サーヴェイ株式会社 2003a 「高田遺跡から出土した木製品の樹種」『神林村埋蔵文化財報告第17 高田遺跡』 神林村教育委員会・山武考古学研究所 p.10-14
- バリノ・サーヴェイ株式会社 2003b 「桃川遺跡群の自然化学分析」『神林村埋蔵文化財報告第19 桃川遺跡群 石川遺跡・草田遺跡・桃川板碑・堤下瓦窯跡』 神林村教育委員会・山武考古学研究所 p.18-55
- バリノ・サーヴェイ株式会社 2003c 「下沖北遺跡から出土した木製品などの樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第125集 一般国道8号柏崎バイパス関係報告書II 下沖北遺跡I』 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 p.39-42
- バリノ・サーヴェイ株式会社 2006 「自然科学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第154集 一般国道253号 上越三和道路関係発掘調査報告書III 三角田遺跡』 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 p.46-62
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編) 2006 『針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特

- 微リスト』伊東 隆夫・藤井 智之・佐野 雄三・安部 久・内海 泰弘（日本語版監修）海青社 p.70 [Richter H.G., Grosser D., Heinz L. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 沙見 真・岡田文男 2005 「見附市元屋敷遺跡出土木製品の樹種調査結果」『見附市埋蔵文化財調査報告 第21号 営園場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書III 元屋敷遺跡II』見附市教育委員会 p.79-84
- 島地 謙・伊東隆夫 1982 『図説木材組織』 地球社 p.176
- 徳永重元・山内輝子 1971 『花粉・孢子・化石の研究法』 共立出版株式会社 p.50-73
- 植田弥生 2002 「木製品および埋没林の樹種同定」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第113集 北陸新幹線関係発掘調査報告書I 寺地遺跡』 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 p.35-43
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998 『広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特微リスト』伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩（日本語版監修）海青社 p.122 [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification]

## 2 平安時代の流路跡に見られる火山灰

新潟大学災害復興科学センター ト部厚志

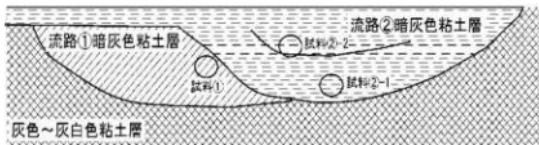
屋敷割付遺跡では、平安時代と推定される流路跡（SD1）が、平安時代以前の灰色～灰白色の粘土層を切り込んで検出された。また、流路跡は灰白色から暗灰色の粘土層によって埋積されているが、削剝（層序）関係から流路①と流路②の2つに区分できる。流路①は、やや有機質な暗灰色の粘土層から構成され、火山灰起源（軽石起源）と推定される白色のバッチを斑紋状に含んでいる。流路②は、有機質で暗灰色の粘土層で埋積されている。流路②の基底に近い層準では、火山灰起源（軽石起源）と推定される白色のバッチを斑紋状に多く含んでいる。

ここでは、流路①・流路②を埋積する粘土層のなかで特に火山灰起源と推定される3試料を採取して、火山ガラスの有無を検討した。

この結果、試料①・試料②-1・試料②-2ではわずかに中間型（Cb）の火山ガラスが含まれることが明らかとなつた。試料に含まれる火山ガラスは風化による溶出により極わずかとなっているが、層相の上で認められる白色の斑状のバッチは軽石片ないしは火山灰の小片と考えられる。

また、本遺跡の試料では火山ガラスの屈折率の測定ができなかつたが、近接する延命寺遺跡（第II章2および第VII章1参照）で検出された平安時代（8世紀）の流路跡からは、多量の軽石片を含む極細粒砂サイズ～シルトサイズの火山灰層が確認されている。そして、同流路の複数の層準から中間型（Cb）から扁平型（Hb）の火山ガラス（屈折率：1.496～1.500）が検出された。

以上の調査結果から、屋敷割付遺跡や延命寺遺跡で発見された自然流路は、火山碎屑物を多量に含んだ洪水流によって埋積した可能性が高いと考えられる。



第14図 平安時代の流路の模式図と試料採取位置

## 第VII章　まとめ

### 1 屋敷割付遺跡と周辺の遺跡

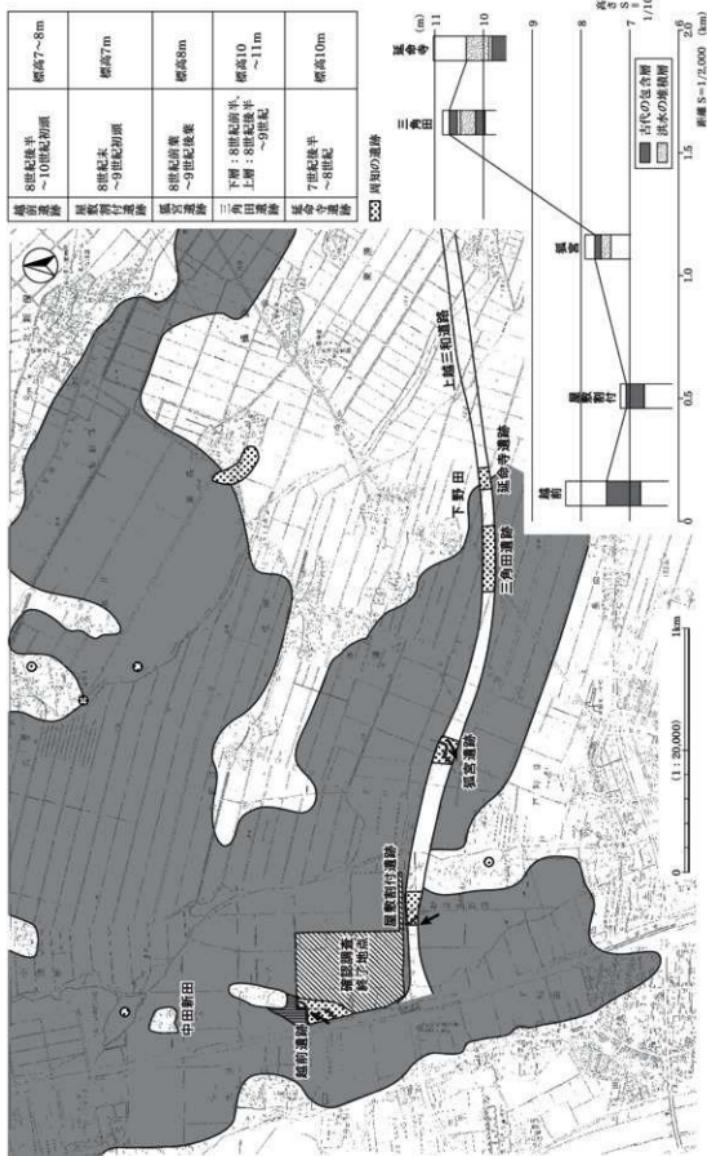
#### A 遺跡の立地と旧地形

高田平野を東西に横断する関川と飯田川の間には、戸野目川・重川などの小河川が蛇行しながら西流する。これら小河川では、これまで多くの遺跡が下流域で発見され、上～中流域での分布はわずかであった(第3図)。しかし、上越三和道路建設にともなうこの数年間の発掘調査により、7世紀～10世紀におよぶ遺跡が一定の距離を置きながら存在することが明らかになってきた(第15図)。どの遺跡も水田下に埋没しており、特に越前遺跡や延命寺遺跡では現地表下約1mという深い地点から遺構・遺物が検出されている。これは、奈良～平安時代と現在とでは地形が大きく異なることを示している。

第15図は、1982(昭和57)年9月13日に起った「9.13水害」の浸水状況(原図:高野1984)に、屋敷割付遺跡周辺の古代遺跡の位置(発掘調査範囲)をプロットしたものである。「9.13水害」は、台風18号がもたらした集中豪雨によって堤防が決壊し、関川・保倉川下流域を中心に浸水家屋4,505棟という甚大な被害をもたらした[高野1984]。この水害による浸水範囲は、地形変化や開発によって現在では見えにくくなっている関川および支流の古い蛇行跡を示すものとして地形学的に評価されている[高野2002]。ほとんどの遺跡が浸水範囲内におさまってしまうものの、現在の集落に隣接する点が注目される。幹線道路脇に広がる新興開発地を除き、古くから営まれた集落は北～北西方向に延びる帯状をなすものが多い。これは、かつて集落間を蛇行しながら流れていた自然流路の存在を物語っており、現在の集落が旧流路によって形成された自然堤防上に営まれていることを示している。そして、古代の遺跡は、それら自然堤防の縁辺部に立地すると判断される。現在の集落から離れ、浸水範囲の真ん中に位置するように見える狐宮遺跡・延命寺遺跡もまた、戸野目や下野田といった現集落につながる埋没した自然堤防の存在を推測させる。狐宮遺跡・越前遺跡・屋敷割付遺跡からは蛇行する自然流路が検出され、河川に近接して遺跡が営まれた古代遺跡の立地状況をよく表している。

#### B 洪水堆積層の検出から派生する問題

延命寺遺跡・三角田遺跡・狐宮遺跡では洪水堆積層が検出されている。延命寺遺跡・三角田遺跡では厚さ数十cmにおよんでおり、地点によっては洪水の結果、大きく地形が変更されたものと推測される。洪水が発生した時期は、洪水堆積層の上下から出土した遺物をもとに8世紀中葉～9世紀前葉であることが明らかとなった[沢田ほか2006]。興味深いのは、洪水堆積層が狐宮遺跡より東側でのみ認められ、屋敷割付遺跡や越前遺跡にまでは及んでいない点である。各遺跡で検出された遺物包含層の標高を比べてみると(第15図)、屋敷割付遺跡を谷底とする起伏に富んだ地形であることが確認できる。洪水堆積層は谷底に近い狐宮遺跡だけではなく、延命寺遺跡や三角田遺跡といった標高の高い地点でも検出されていることから、低い場所にのみ堆積したわけではないことが分かる。屋敷割付遺跡や越前遺跡では明瞭な洪水堆積層が確認されていないことから、現在の戸野目川の右岸と左岸との地形的差異が反映された結果と推測される。ただし注意が必要なのは、屋敷割付遺跡の自然流路SD01から洪水流によって埋積したと推測される火山ガラスが検出されている点である(第VI章2参照)。延命寺遺跡でも複数の層位から火山ガラスが



第15図 9.13水害浸水域と道路の分布 [上越市街圖(5)] 1 : 10,000原図

検出されており、両遺跡の火山碎屑物が同一起源の可能性がある。のことから、洪水堆積層を形成しないまでも、洪水が及んだ可能性を考慮する必要があろう。これまで、高田平野の古墳時代～古代の遺跡から多く検出される自然流路は、「弥生の小海退」によって生じ、「平安の小海進」によって埋積した結果と考えられてきた〔高野2004〕。しかし、今回、山地を起源とする火山灰が流路の覆土中で検出されたことから、自然流路の埋積要因を再考する必要が生じたと言えるだろう。今後は、火山ガラスを含む層位を鍵層として、広域を対象とした考古学的・自然科学的検討を行うと同時に、火山ガラスの供給源についての解明が大きな課題となろう。

### C 遺跡の動態と地形変化

上越三和道路関連で調査した5遺跡では、8世紀前半に2か所であった遺跡数が8世紀後半には4か所へと増加する。そして、東から西に向かって古い遺跡から新しい遺跡が並ぶ点が特徴である。高田平野の古代集落では8世紀中頃がひとつの画期と捉えられており、河岸段丘上に集落が成立し、集住形態が認められるようになる〔笠澤2003a〕。わずか5遺跡の検討ではあるものの、8世紀後半において遺跡数が増加するという現象は、高田平野における古代集落の画期と運動したものと見て良いだろう。そして、東から西に行くほど新しい時期の遺跡が分布するということは、遺跡の動態と地形変化とが相関関係にあることを物語っているのではないだろうか。孤宮遺跡以東で確認された洪水堆積層もこの画期とほぼ時を同じくすことから、関連を考慮する必要があるだろう。高田平野における古代遺跡の動態には、社会的要因のほかに、地形環境の変化が大きく影響した可能性がある。

## 2 人為的埋土土坑

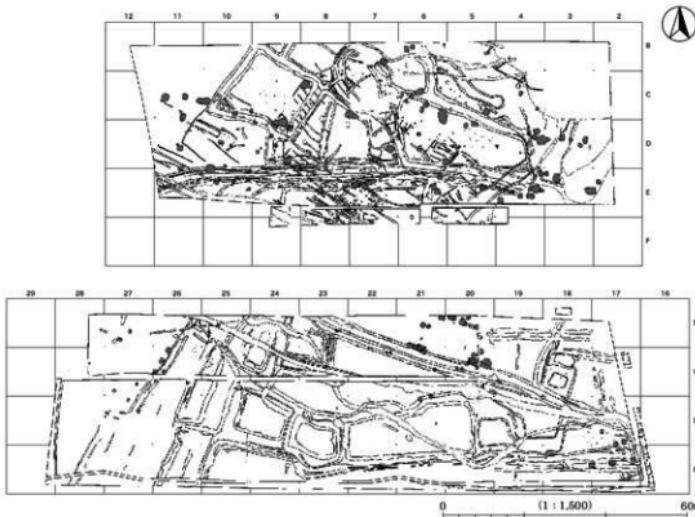
### A 屋敷割付遺跡と上浦遺跡

屋敷割付遺跡からは、人為的に埋め戻されたと判断される土坑が13基検出された。ほぼ隅丸方形～長楕円形の平面形をなすものの、規格性は弱く、底面が凹凸をなすものが目立つ。覆土から出土する遺物が平安時代の土器のみであること、検出層位がIIIb層に限られること、平安時代（8世紀末～9世紀初頭）の遺物集中地点（SX17）の下位から検出されたことなどから、平安時代以前の遺構と判断するに至った。また、数基の土坑からは炭化したカヤツリグサ科の種子が一定量検出された（第VI章1参照）が、水田雑草であるカヤツリグサ科の種子は遺構埋め戻し時の混入と考えられ、当時の周辺環境と季節を物語るもの、遺構の機能を直接判断する材料とはならなかった。土坑群は遺跡を横断する自然流路の両岸で検出され、長165cm×短135cm前後の小型土坑と、長270cm×短215cm周辺の大型土坑がセットをなすよう分布していた。

人為的に埋め戻されたと判断される土坑について県内の事例を検索してみたが、いくつかの遺跡で散見されるものの報告例に乏しく、遺構の規模や遺跡内における分布状況を窺うことすら難しい。わずかに新潟市（旧新津市）上浦遺跡でまとまった検出例が知られ、発掘調査報告書〔坂上2003〕で詳しく触れられていることから、上浦遺跡との比較をとおして、「人為的埋土土坑」について若干の検討を加えてみよう。

上浦遺跡は、沖積地の微高地に築かれた奈良～平安時代（7世紀末～10世紀前葉）の集落跡である。現在、信濃川・小阿賀野川・能代川に三方を囲まれる地点に遺跡は所在し、多くの湿地や湖沼に囲まれた浮島状の微高地に立地していたと推測される。埋文事業団と新津市教育委員会によって過去3回の発掘調査

が行われ、大型掘立柱建物や、銅製帶金具・銅製素文鏡・三彩小壺などが検出されたことから、高階層居住や律令祭祀の場といった性格が推測されている。「人為的埋土土坑」は、地山のシルトと粘土がブロック状に混じりあう覆土の特徴から、人為的に埋め戻された遺構として本報告書で設定された名称である。遺跡は、南北1km・東西300mの広大な範囲に広がると推測されているが、人為的埋土土坑は、埋文事業団が調査したI・II区でのみ分布する(第16図)。同地区からは、掘立柱建物8棟・井戸4基・土坑175基・溝229条・ピット183基が検出されたものの、遺構の重複関係から、多くの人為的埋土土坑が遺構形成初期に構築されたと判断された。遺構の平面形には円形・梢円形・方形・隅丸方形などの様々が認められるものの、断面形態は箱状もしくは台形状ではほぼ統一される。出土遺物が少なく、土坑の帰属時期は明確ではないが、検出層位やわずかな出土遺物から9世紀前半以前に位置づけられる。なお、墓坑あるいは井戸の可能性を考慮してリン・カルシウム分析と珪藻分析が調査時に実施されたが、分析の結果どちらの可能性も低いと判断された。



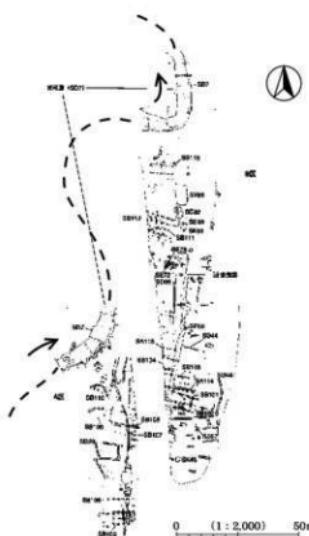
第16図 上浦遺跡における人為的埋土土坑の分布

屋敷削付遺跡と比較すると、平面および断面形態、覆土のあり方には共通点が多い。報告書では土坑の規模や長軸の方向を示すデータが一部しか公開されていないため規模に関して詳細は不明だが、屋敷削付遺跡例よりも小規模な土坑が目立ち、土坑の長軸は東西方向が多いように見受けられる。特に注目されるのは、上浦遺跡の20～21・B～Cグリッドにおける内径15mほどの環状土坑群の存在である。これらの土坑群は他の土坑から独立して分布し、溝などとの重複もほとんど認められない。一方、屋敷削付遺跡においても、内径10m弱とやや小規模ながら、環状土坑群が10～13・Cグリッドで認められる(図版1)。環の中央に向かって短軸を向けるものが多い上浦遺跡とは異なり、屋敷削付遺跡では長軸を向けるものが多いなど相違点も認められるが、異なる地域における共通するあり方に注目したい。上浦遺跡が7世紀末

～10世紀前葉と長期間継続する遺跡であるのに比べて、屋敷削付遺跡は8世紀末～9世紀初頭の比較的短期間に形成・廃絶されるという点で大きく異なる。しかし、重要なのは、上浦遺跡で最も早く出現する遺構が人為的埋土土坑であり、掘立柱建物や多くの溝はその後の開発によって構築されていることである。つまり、人為的埋土土坑だけで構成される段階が上浦遺跡の初期に存在したということである。これは、他の遺構が未検出であった屋敷削付遺跡と共通したあり方と言える。さらに、広範囲に広がる上浦遺跡のなかで、人為的埋土土坑が限られた地点にのみ分布するという点にも注目したい。

### B 屋敷削付遺跡と越前遺跡

屋敷削付遺跡の北西500mの至近に所在する越前遺跡は8世紀後半～9世紀後半を主体とする集落遺跡で、掘立柱建物13棟・井戸14基・土坑42基・溝などの多くの遺構が検出されている（第17図）。個々の遺構に関するデータが少なく、不詳な点が多いものの、人為的埋土土坑は存在しないらしい。計画的な遺構の配置や、多量の墨書き土器・律令祭祀具・施釉陶器などの出土から、公的機関や富裕層が関わった遺跡と評価されている〔笛澤2003b〕。特徴的なのは自然流路に沿うように建物群が構築されている点で、



第17図 越前遺跡遺構配置図

出土遺物などから、この流路は遺跡の存続期間中機能していたとされている。遺跡周辺で実施した確認調査（上越市教委1993・1999など）の結果、遺跡が中田新田集落へと伸びることが明らかにされている一方、屋敷削付遺跡側へは広がらないことが分かっている（第15図）。両遺跡で検出された自然流路は、機能時期や覆土・規模・形態などが類似することから同一流路の可能性があるものの、両遺跡をつなぐ地点における確認調査で流路の検出が報告されていないことから不詳とせざるを得ない。越前遺跡と屋敷削付遺跡は、同時期の遺跡でありながら、遺構・遺物の内容では質量共に大きな違いがある。両遺跡は400mの距離にあるが、何らかの有機的関係が推測されるものの確たる証拠を見出すことができない。唯一指摘できるのは、「十」の墨書き土器が両遺跡で出土している点である。屋敷削付遺跡では3点の「十」墨書き土器が出土しており、うち1点（図版7-31）は自然流路から出土した。越前遺跡では約70点の墨書き土器が出土しており、その中に「十」墨書き土器が含まれている（点数不明）。また、墨書き土器が自然流路からのみ出土している点は屋敷削付遺跡との関係で注目される。

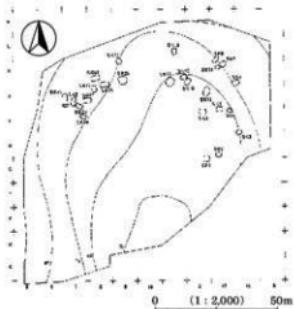
### C 人為的埋土土坑の機能

これまで見てきた3遺跡について改めて比較すると同時に、人為的埋土土坑の機能についても検討してみよう。

上浦遺跡では、人為的埋土土坑が限られた地点に分布し、ほかの遺構を伴わずに単独で存在していた段階が存在した。そして、高階層あるいは有力者が関与する集落であった可能性が高い。越前遺跡もまた公的機関や富裕層が関わった遺跡と推測された。一方、屋敷割付遺跡は人為的埋土土坑のみで構成され、ほかの2遺跡とは大きく異なる特徴を持つ。しかし、掘立柱建物群などの居住遺構と人為的埋土土坑がセットとなる上浦遺跡を一つの集落形態として捉えると、越前遺跡と屋敷割付遺跡が補完しあいながら有機的関係にあるように見ることができ。つまり、集落の中心地である越前遺跡と、その縁辺部にあたる屋敷割付遺跡という集落構造を想定してみる

わけである。仮に、人為的埋土土坑の分布が建物遺構から離れた地点で独立して存在するのが実態であるとするならば、土坑の機能と分布状況には関連があると考えるべきであろう。実際に、越前遺跡と屋敷割付遺跡との間には広い遺構空白域が存在することから、屋敷割付遺跡が居住空間から隔絶された場所に所在するという印象が強い。そして、日常的空间から離れて構築されるという非日常的性格や、人為的に埋め戻されるという構築方法を勘案すれば、やはり墓坑としての機能を考えるのが妥当と思われる。ここで参考となるのが糸魚川市岩野A遺跡・E遺跡〔高橋ほか1986〕と岩野下遺跡〔和田ほか1987〕の事例である。岩野A・E両遺跡からは、長楕円形あるいは隅丸方形プランの土坑が合計40基ほど検出された。明確な帰属時期は不明ながら、周辺遺跡の状況から古代の遺構である可能性が高い。全てが人為的に埋め戻されており、土坑同士の切り合いが認められず、土坑以外の遺構も全く検出されなかった。特筆されるのは、土坑群の分布に明らかな規格性を見出すことができる点である。岩野A遺跡では、調査区内の3~4か所から土坑数基づつが検出されたが、最も集中する地点では、ほぼ長軸をそろえた11基の土坑が3~5基づつ3列に並ぶ。長軸の方向がほぼ揃うことから、北方を意識した連続的構築が推測される。一方、岩野E遺跡では、24基の土坑が丘陵縁辺の緩斜面上に弧を描くように分布する(第18図)。やや粗密があるものの、中央の遺構空白域を境にして、土坑群が東西2つにまとまることが確認できる。また、多少のブレはあるものの、土坑の長軸は東西方位を指向するらしい。土坑群の機能について、形態や分布状況・周辺遺跡との位置関係などから、「墳墓群」の可能性が指摘されている(高橋ほか前掲)。また、岩野下遺跡は、岩野A・E両遺跡の西方約100mに位置する奈良～平安時代の集落である。竪穴住居1軒・掘立柱建物7棟などが検出され、うち1棟は、2×4間の母屋に庇が付いた大型建物である。岩野下遺跡と岩野A・E両遺跡の間には比高差約20mの崖が存在し、ちょうど、岩野下遺跡から見上げる高台に岩野A・E両遺跡が位置する事になる。つまり、集落と土坑群は互いに目視できる位置関係にありながら、明瞭に分布域が異なっているのである。

以上、新潟県内の奈良～平安時代遺跡を通して、「人為的埋土土坑」のあり方や居住域との関係などについて確認してきた。そして、上浦遺跡における居住域と土坑群との関係、集落の岩野下遺跡と少し離れた岩野A・E両遺跡で検出された土坑群の存在などは、越前遺跡と屋敷割付遺跡とに見出された補完関係と類似する構造を示すものと考えたい。これらの事例を通して、本遺跡の「人為的埋土土坑」の機能を墓坑と推定したい。そして、屋敷割付遺跡が平安時代の墓域であった可能性をここに提示したいと思う。



第18図 岩野E遺跡の人為的埋土土坑

かし、越前遺跡と屋敷割付遺跡との距離が約400mもあることなど、課題もまた多い点を確認しておきたい。

また、土坑群が環状に配置されることを重視して、建物遺構とみることもできるだろう。新潟市（旧新津市）細池遺跡では、不定形土坑15基が内径約5mの環状に連なって検出され、建物遺構と認定されている〔小池ほか1994〕。9世紀後半を主体とする同遺跡では、自然流路に隣接して、溝に区画されるよう環状に配置された土坑群が検出された。周辺には炉跡2基・貼り床状遺構1基なども検出されている。入口状の1対のビットが付随することや、円形に土坑が配置されていることなどを根拠として建物遺構と判断されている。土坑の覆土に関する記載がなく、人為的埋土土坑か否かの判断ができない。しかしながら、不整形な土坑の平面形態や、遺構の希薄な地点にはほぼ単独で分布するというあり方は、屋敷割付遺跡例とよく似ている。円形柱穴配置の建物が、平安時代の遺跡のなかでほかにどれだけ検出されているのか検索する必要があるが果たしていない。人為的埋土土坑が墓坑であるという確たる証拠がない現状では、建物遺構の可能性を含めて今後の調査・研究に期待する点が多い。

## 要 約

- 1 屋敷割付遺跡は、新潟県上越市大字戸野目古新田字屋敷割付ほかに所在する。戸野目川左岸の微高地に立地し、標高は7m前後である。
- 2 調査は国道253号上越三和道路の建設に伴い、平成18年度に実施した。調査面積は12,630m<sup>2</sup>である。
- 3 削平や擾乱などにより遺物包含層はほとんど残っていなかったが、わずかに残っていた地点からコンテナ7箱分の土器が集中して出土した。土器の帰属年代は8世紀末～9世紀初に限られ、比較的短期間に形成・廃絶された遺跡であったと考えられる。
- 4 遺構は平安時代の土坑16基、ピット2基、溝1条とわずかであった。そして、13基の土坑が人為的に埋め戻されたことが明らかなる「人為的埋土土坑」であった。人為的埋土土坑の時期は、覆土中から出土した遺物などから8世紀末～9世紀初に帰属する。
- 5 遺跡を横断する自然流路が1条検出された。覆土中から古代の遺物が出土しており、古代に機能した流路であることが明らかである。隣接する越前遺跡で検出された自然流路につながる可能性が高い。
- 6 自然流路の覆土中から火山ガラスが検出された。風化が激しく、屈折率などを測定することができなかつたが、洪水流によって東頭城山方面から運ばれてきたものと考えられる。なお、火山ガラスは約1.7km東に位置する延命寺遺跡でも発見されており、関連が推測される。
- 7 新潟県内における他遺跡の類例などを通じて、「人為的埋土土坑」が墓坑である可能性を検討した。
- 8 北西400mには同時代の越前遺跡が存在するものの、多数の掘立柱建物などが検出されており、本遺跡との差異は大きい。そこで、越前遺跡と屋敷割付遺跡が集落と墓域という補完関係にあったとする仮説を提示した。しかし、試掘調査結果などから両遺跡の間には遺構空白域が存在するなど、課題は多く、今後の検証作業が必要である。

## 引用・参考文献

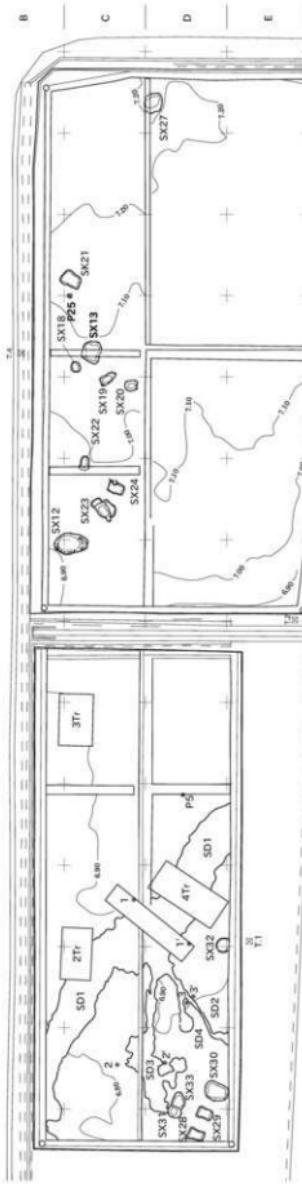
- 相沢 央 2004 「頸城群の人々の暮らし」『上越市史 通史編1 自然・原始・古代』新潟県上越市
- 新井市教育委員会 2000 『新井市遺跡発掘10年の歩み』新潟県新井市教育委員会・新井市遺跡発掘の会
- 安藤正美 「17世紀代のすり鉢について」『越佐補遺産』第4号 越佐補遺産の会（新潟県長岡市）
- 大橋康二 1993 『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニューサイエンス社
- 岡本都栄 1999 『新潟県の地形外観』『新潟県の考古学』高志書院
- 春日真実 2005 「越後ににおける奈良・平安時代土器編年との対応関係についてー「今池編年」・「下ノ西編年」・「山三賀編年」の検討を中心にー」『新潟考古』第16号 新潟県考古学会
- 北野博司 2003 「四ツ星遺跡」「江向遺跡」『上越市史 資料編2 考古』新潟県上越市
- 小池義人ほか 1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第59集 番池遺跡・寺道上遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小島幸雄・中村美恵子 1984 『新潟県上越市 本長者原庵寺確認調査概要』新潟県上越市教育委員会
- 小島幸雄 1991 『新潟県上越市 中島廻り遺跡発掘調査報告書』新潟県上越市教育委員会
- 小林昌二 1998 「御田の阿櫻夫」 九五一人『日本歴史』618
- 坂井秀弥ほか 1984 『新潟県埋蔵文化財調査事業団報告書第35集 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1983 『栗原遺跡第6次発掘調査概報』新潟県教育委員会
- 坂上有紀 2003 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第118集 上浦遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 笛澤正史 2003a 「第5章第1節 時代概説」『上越市史 資料編2 考古』新潟県上越市
- 笛澤正史 2003b 「第5章第2節10 越前遺跡」『上越市史 資料編2 考古』新潟県上越市
- 笛澤正史・中村直人・大居敬子 1997 『新潟県上越市 保坂遺跡発掘調査報告書』新潟県上越市教育委員会
- 笛澤正史 2002 「上越地方最大の須恵器窯跡群－末野・日向窯跡群－」『三和村史 自然・考古編』新潟県三和村
- 笛澤正史 2003 「第5章古代 第1節時代概説」『上越市史 資料編2 考古』新潟県上越市
- 沢田 敦ほか 2006 『新潟県埋蔵文化財調査事業団報告書第154集 三角田遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 上越市教育委員会 1981 『上越市遺跡詳細分布調査報告書』
- 上越市教育委員会 1993 『市内遺跡確認調査概要報告書』上越市教育委員会
- 高田平野团体研究グループ 1981 「高田平野の第四系と形成史－新潟県の第四系、そのV－」『新潟県教育学部高田分校研究紀要』第25号 新潟大学教育学部高田分校
- 高野武男 1984 『高田平野の9.13（1982）水害と新興住宅地』『郷土新潟県の生活風土』新潟県社会科教育研究会（上越市）
- 高野武男 2002 『第1章第4節1 平野の地形と集落の立地』『上越市史 資料編1 自然』新潟県上越市
- 高橋 保ほか 1986 『新潟県埋蔵文化財調査事業団報告書第45集 中原遺跡・岩野A遺跡・岩野E遺跡』新潟県教育委員会
- 高橋 勉 1985 『月岡遺跡 範囲確認緊急調査報告書』新潟県新井市教育委員会
- 高橋 勉 1996 『平成7年度 新井市遺跡確認調査報告書 倉田遺跡』新潟県新井市教育委員会

- 戸根与八郎ほか 1985 『新潟県埋蔵文化財調査事業団報告書第32集 宮野遺跡』新潟県教育委員会  
新潟県農地部農村総合整備課 1980・1981 『新潟県上越地域土地分類基本調査－高田東部・高田西部』  
秦 繁治・小林義廣・草野英二・高野武男・小林昌二 1998 『櫻井A遺跡』新潟県頸城村教育委員会  
秦 繁治・小林義廣 1999 『等仙寺・梶木・山崎塚遺跡』新潟県清里村教育委員会  
秦 繁治・坂井秀弥 1990 『法花寺遺跡(魔寺)他発掘調査報告書－三和村の遺跡と開発史』新潟県三和村教育委員会  
北陸地方建設局北陸技術事務所 1981 『新潟県平野部の地盤図集(柏崎・高田平野編)－地形分類図およびN値等  
深線図(2葉)』  
星野信明ほか 1996 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第80集 沖ノ羽遺跡II(B地区)』新潟県教育委員会・財団法人  
新潟県埋蔵文化財調査事業団  
四ツ屋遺跡調査団 1988 『新潟県上越市 四ツ屋遺跡発掘調査報告書』新潟県上越市  
渡邊裕之ほか 2005 『新潟県埋蔵文化財調査事業団報告書第138集 台の上遺跡・畠ノ上遺跡・五反田遺跡』新潟  
県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団  
和田寿久ほか 1987 『新潟県埋蔵文化財調査事業団報告書第46集 岩野下遺跡』新潟県教育委員会

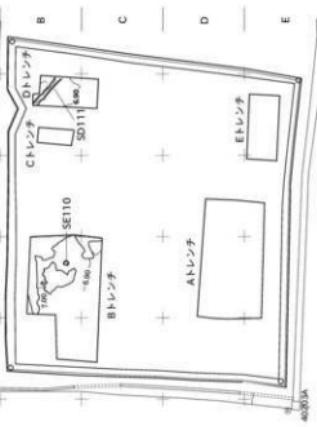




図 版



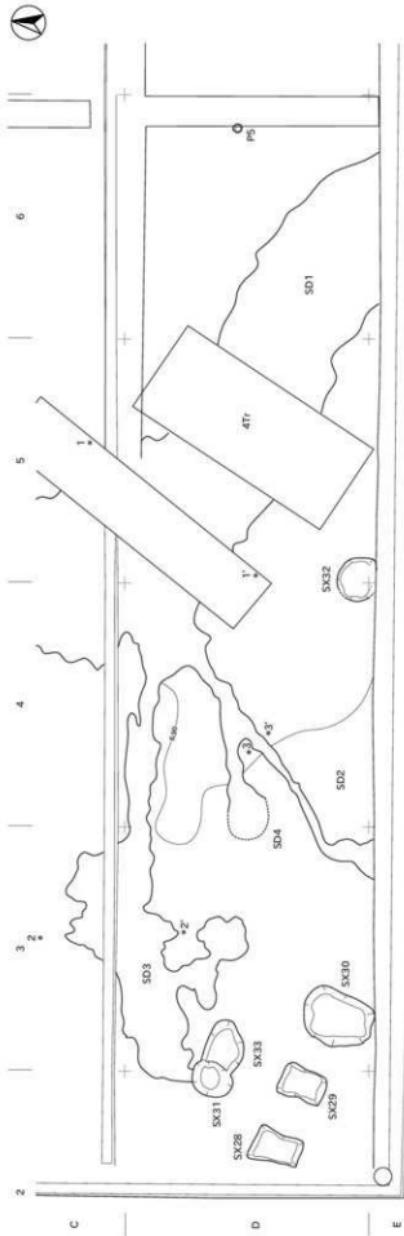
西区



西区



分割図配置

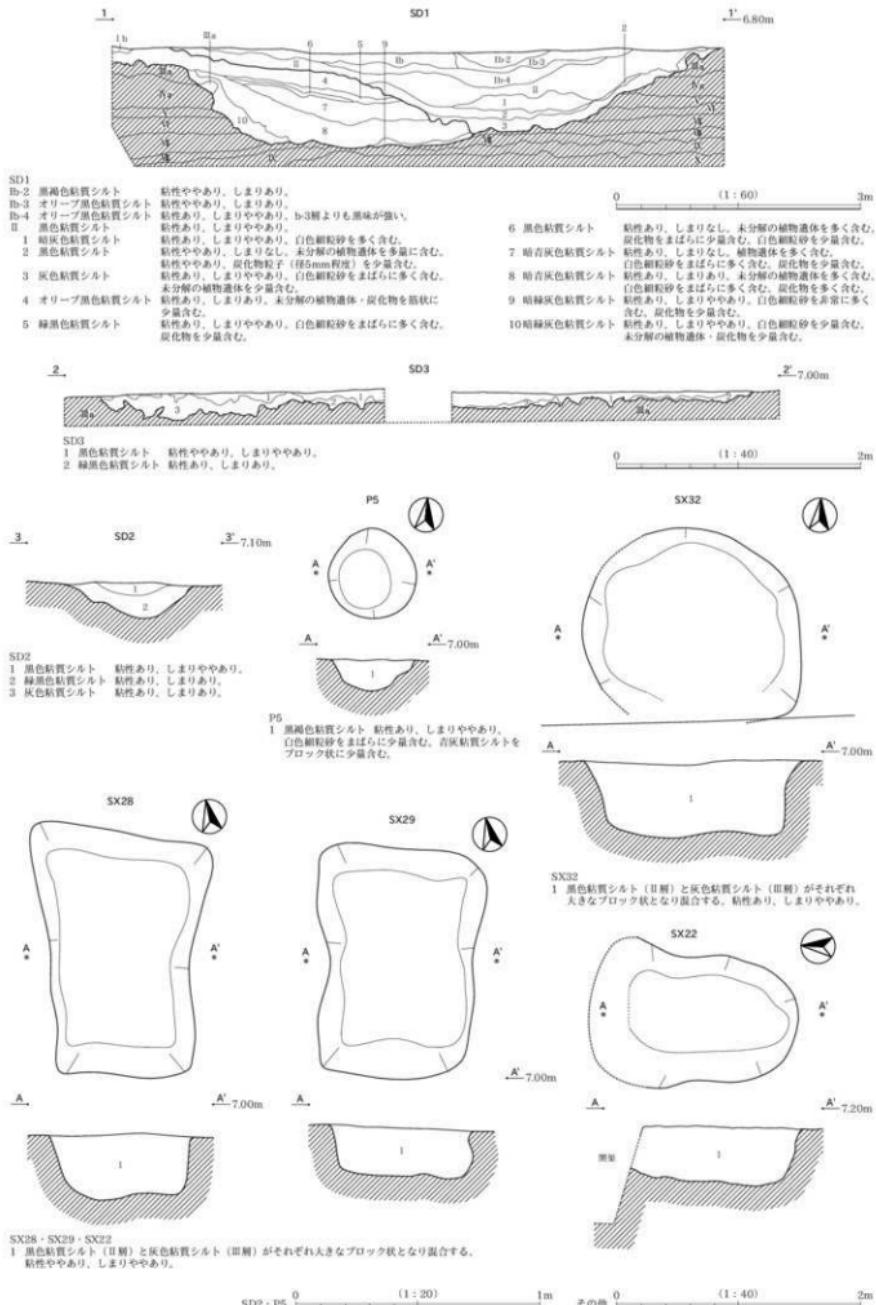


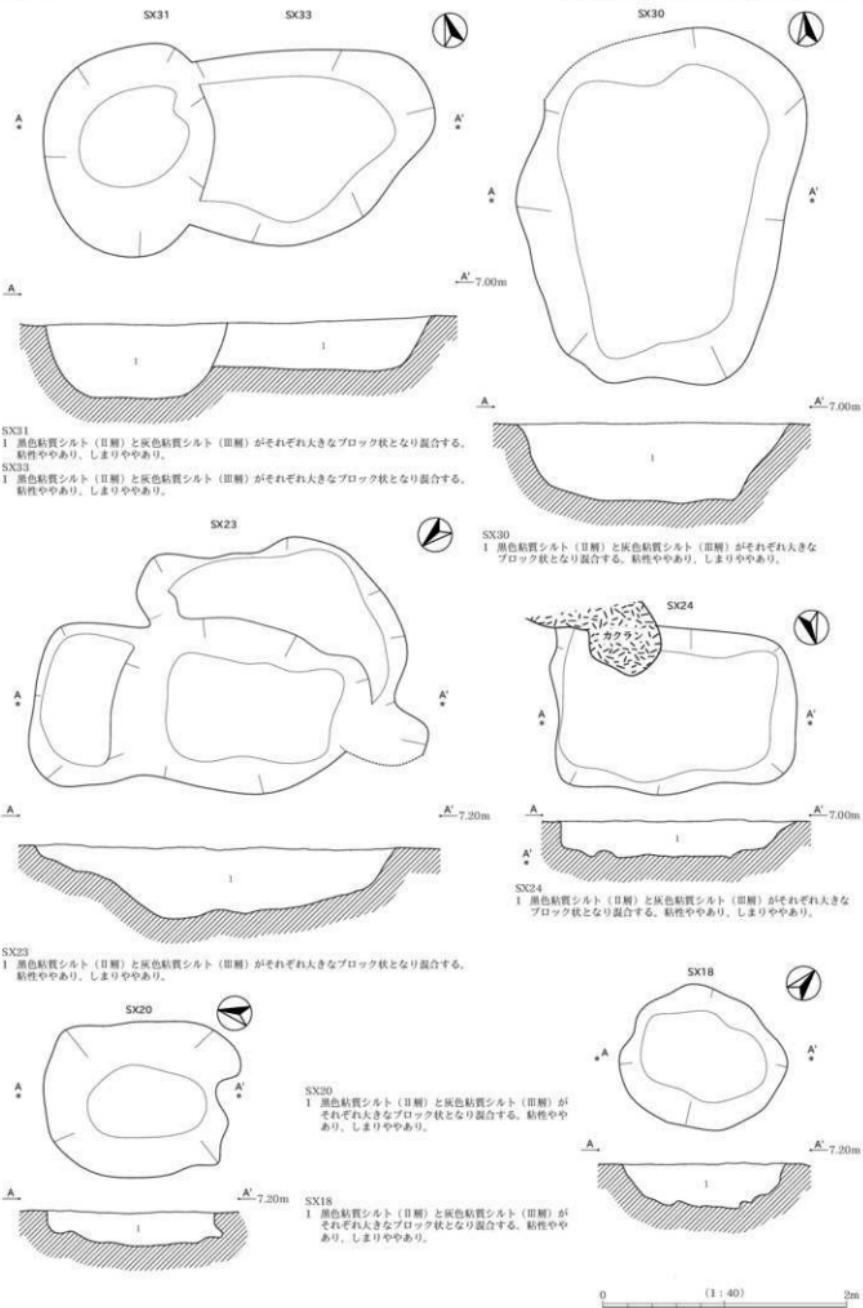
分割図①

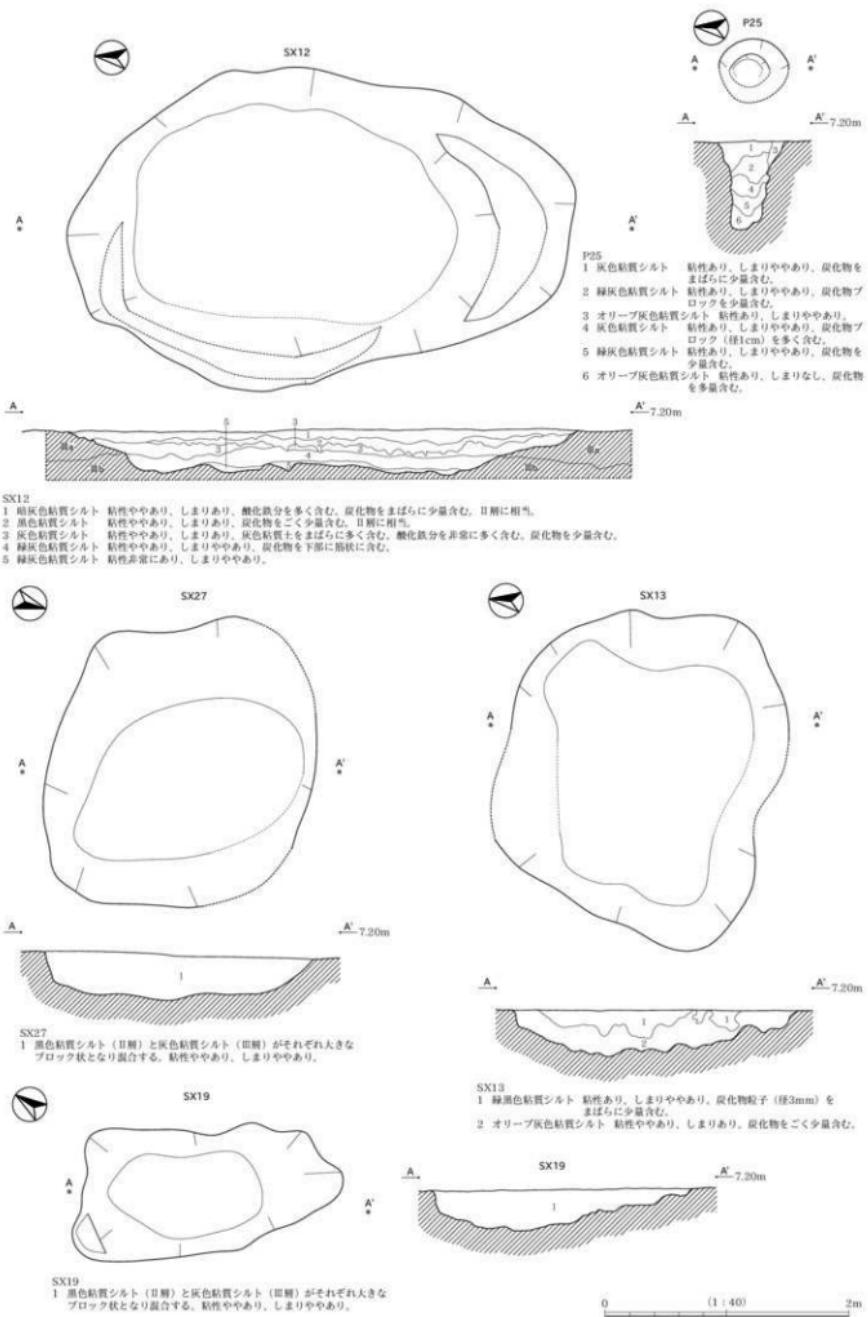


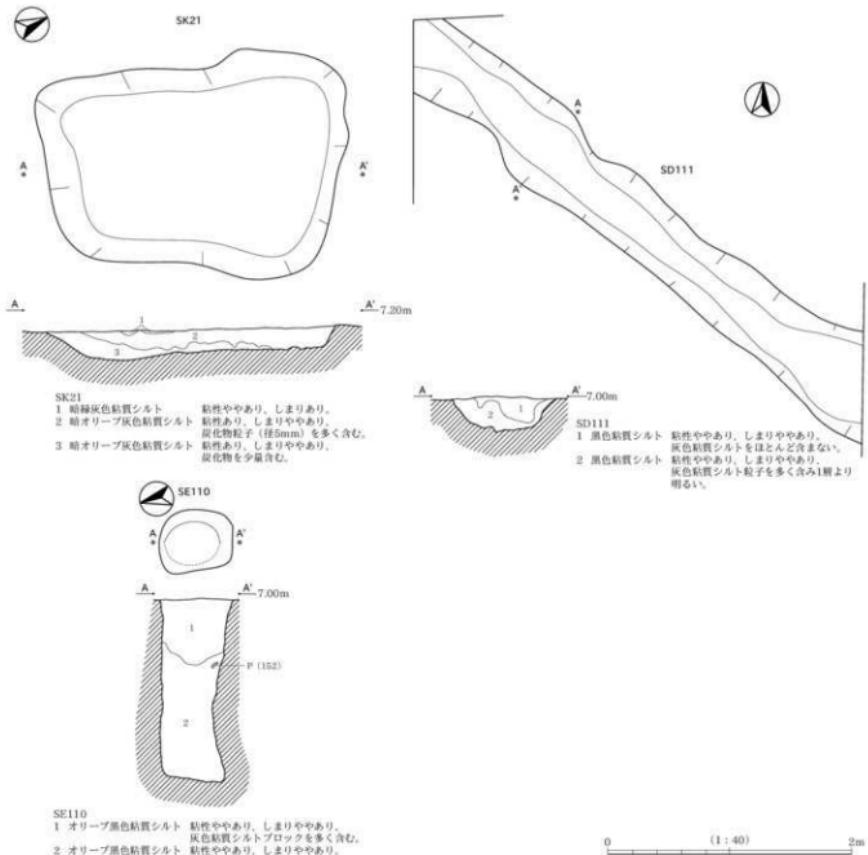
分割図②

0 (1 : 200) 10m

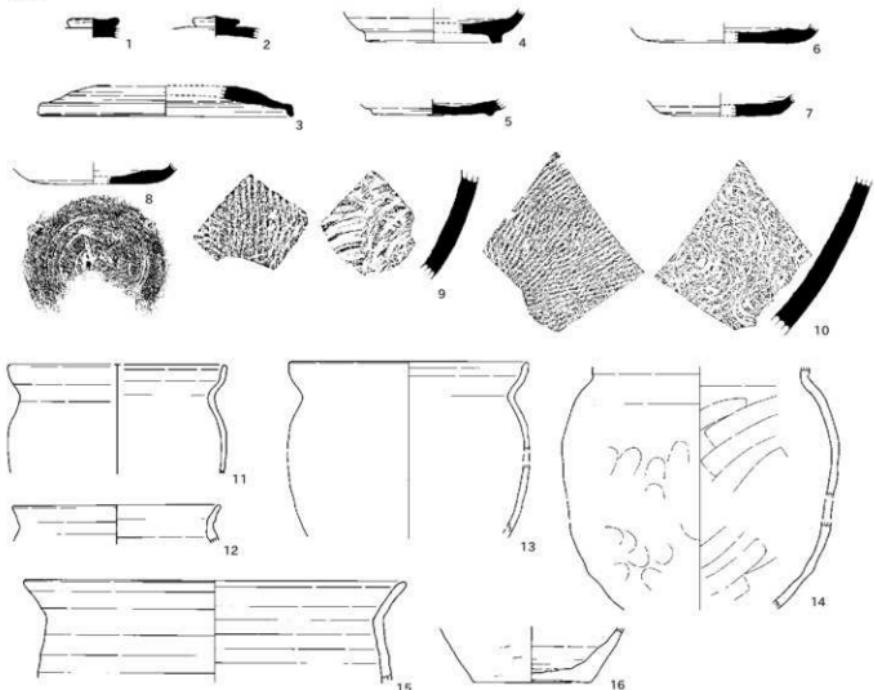




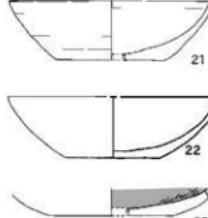
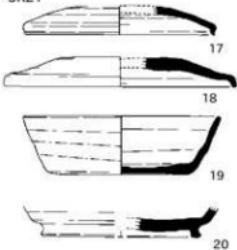




## SX12



## SK21



P25



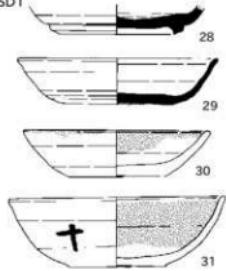
SX13



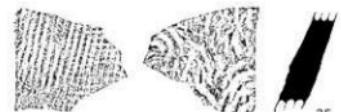
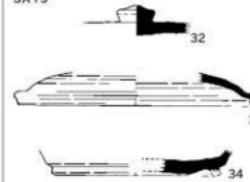
## SD111



## SD1



## SX19

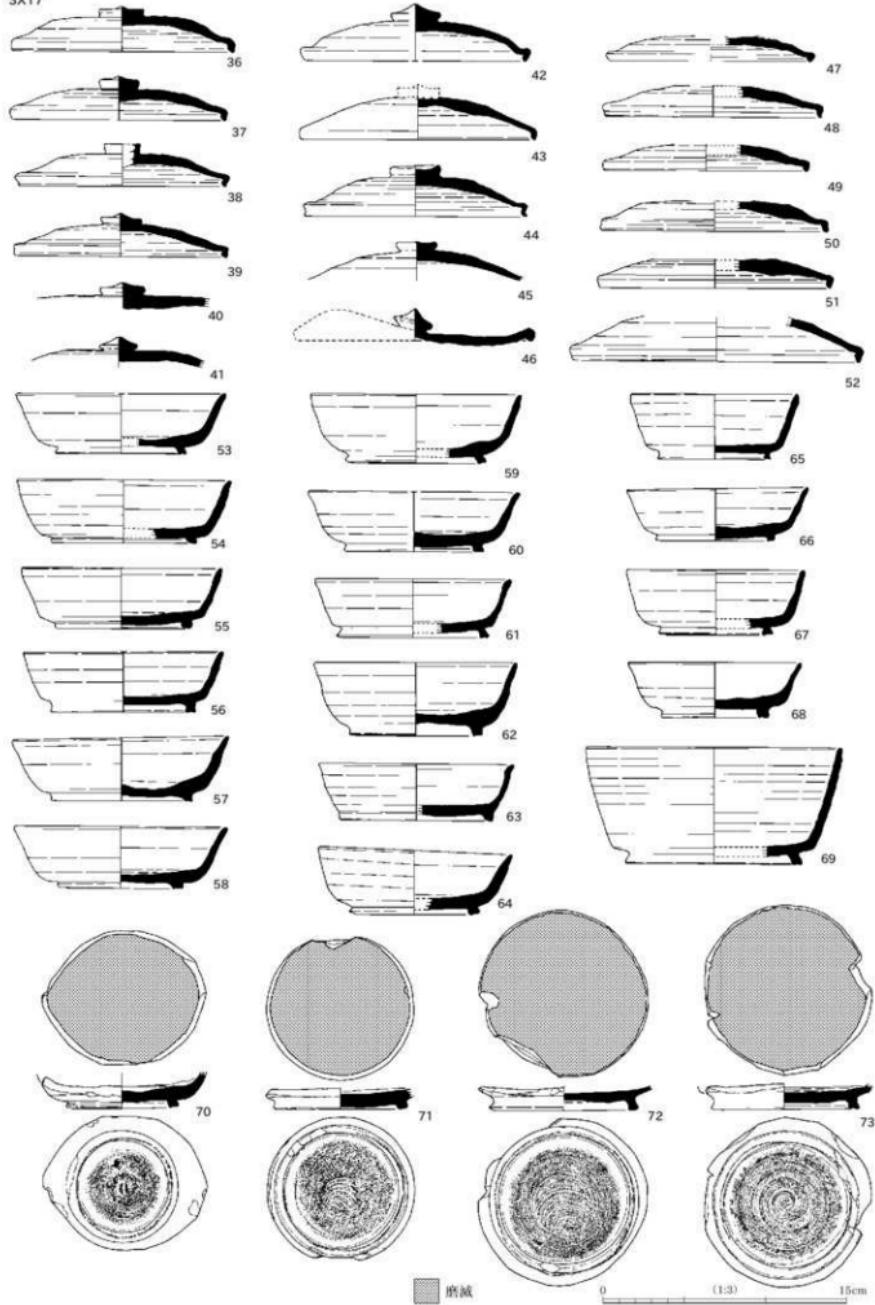


スヌ

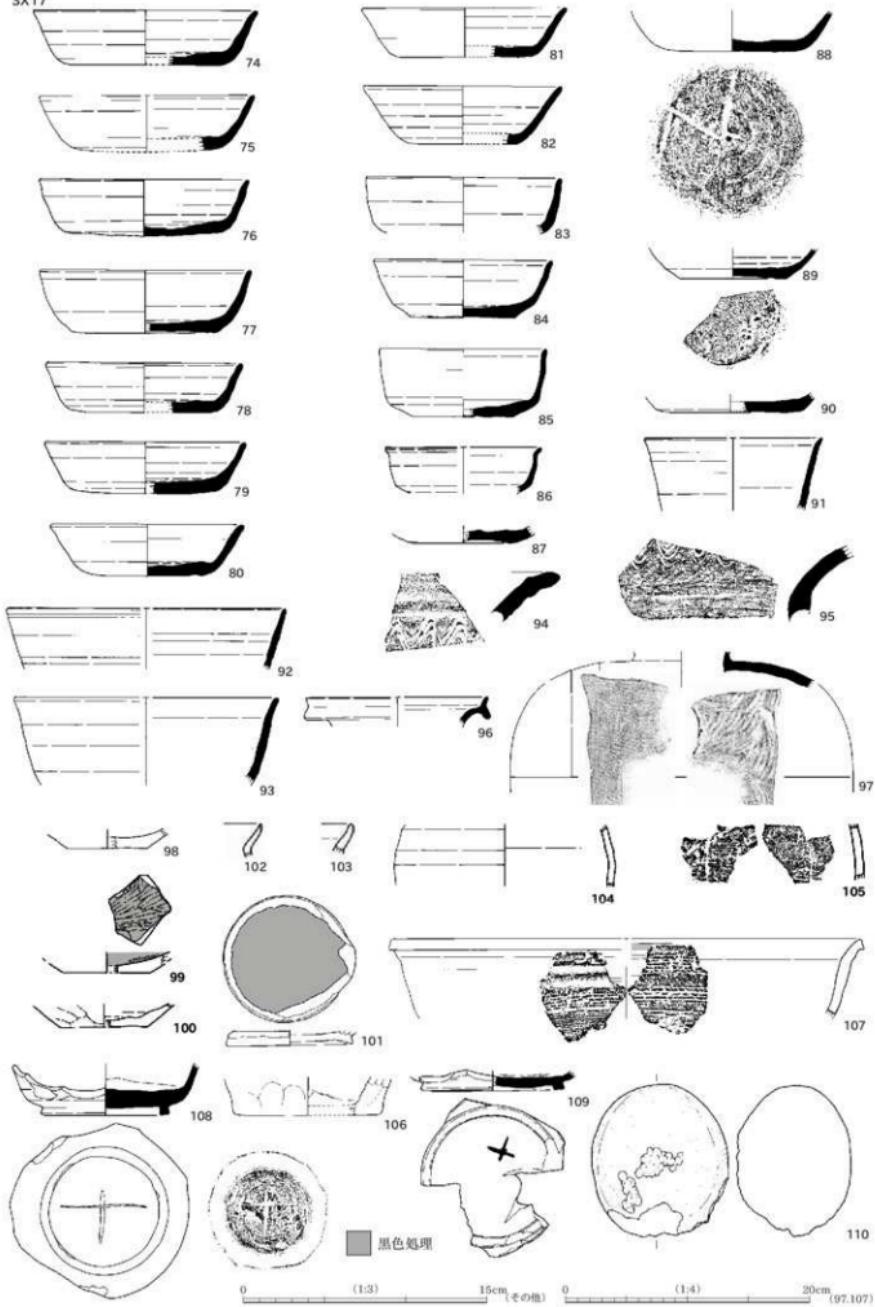
黒色処理

0 (1:3) 15cm (その他) 0 (1:4) 20cm (10)

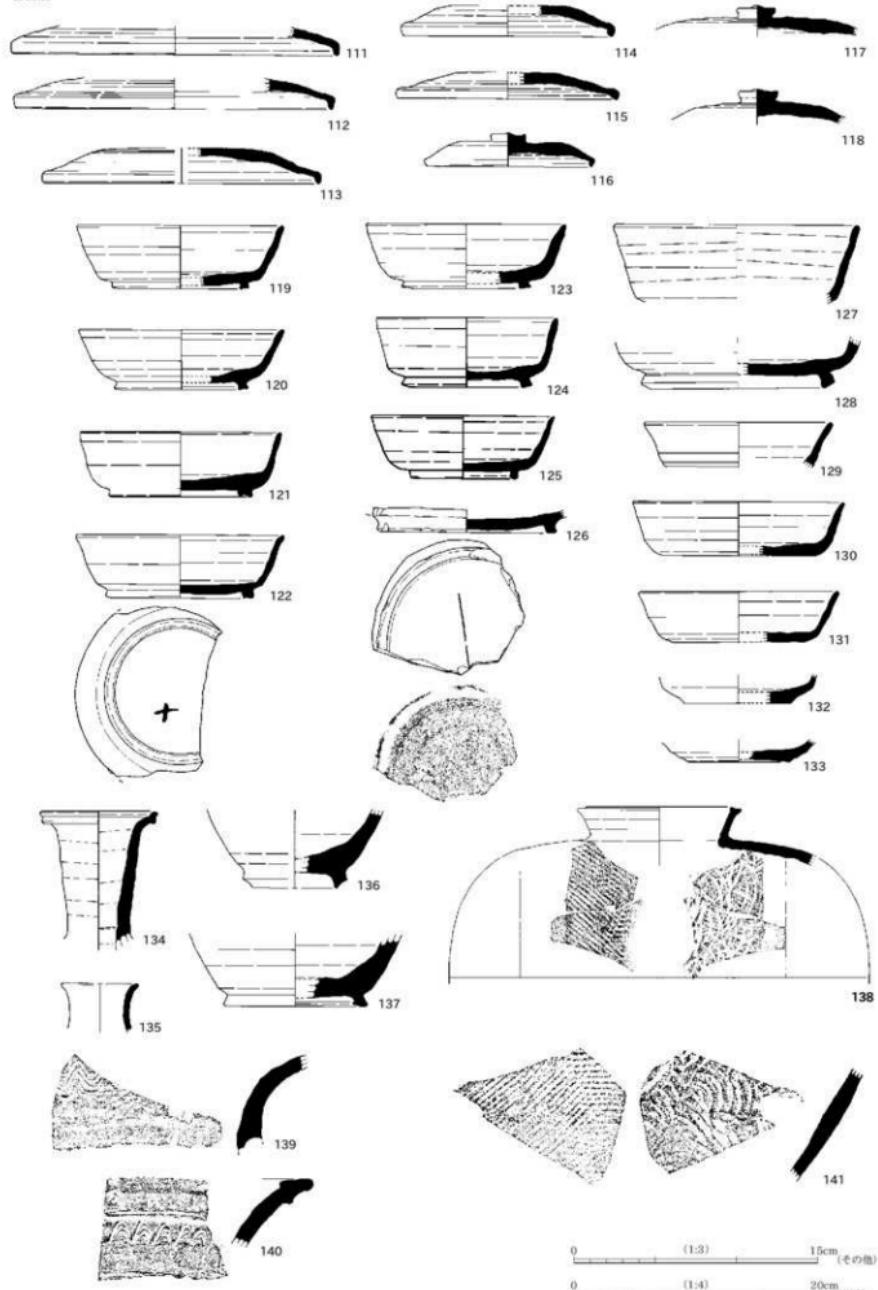
SX17



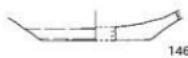
SX17



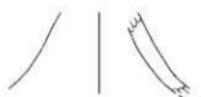
## 包含層



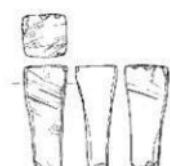
## 包含層



■ 黒色処理



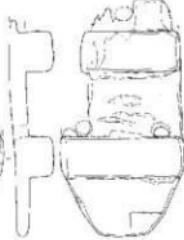
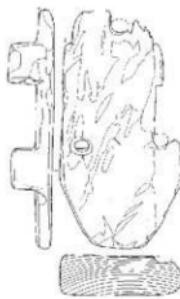
■ 黒漆 ■ 赤漆



## SE110



149



152

153

154

155

■ 砂目

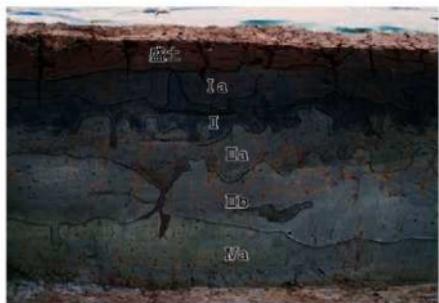
0 (1:3) 15cm (その他) 0 (1:4) 20cm (155)



1 SD1・2・3・4全景（西から）



2 SD1セクション（西から）



3 基本層序③（南から）



4 人為的埋土土坑完掘（南西から）



5 SX18セクション（南から）



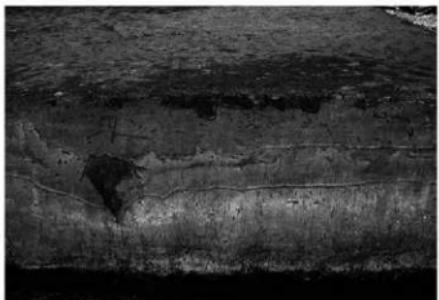
6 SX13セクション（西から）



7 SX12遺物出土状況（西から）



8 SK21東西セクション（南から）



9 基本層序（西から）



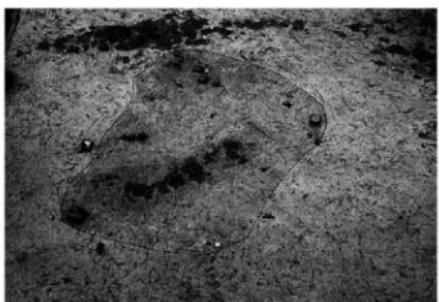
10 SD1検出状況（南東から）



11 SD2セクション（南西から）



12 SD3セクション（西から）



13 SK21検出状況（南から）



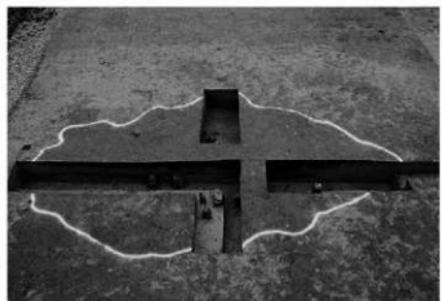
14 SK21南北セクション（東から）



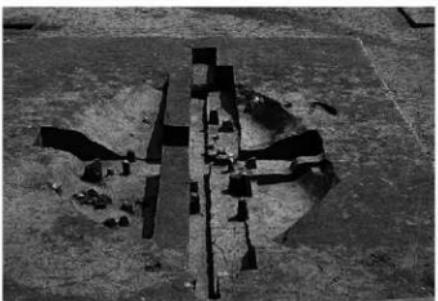
15 SK21遺物出土状況（東から）



16 SK21完掘（東から）



17 SX12検出状況（西から）



18 SX12遺物出土状況（北から）



19 SX12完掘（北から）



20 SX13完掘（西から）



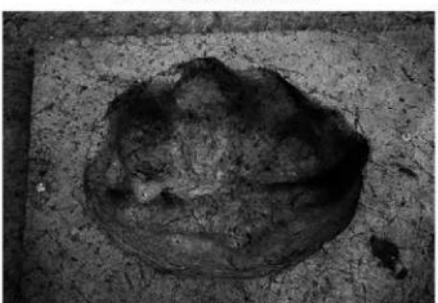
21 SX17遺物出土状況（南から）



22 SX17遺物出土状況（西から）



23 SX17遺物出土状況（北から）



24 SX18完掘（南から）



25 SX19 セクション（西から）



26 SX19 完掘（西から）



27 SX20 完掘（西から）



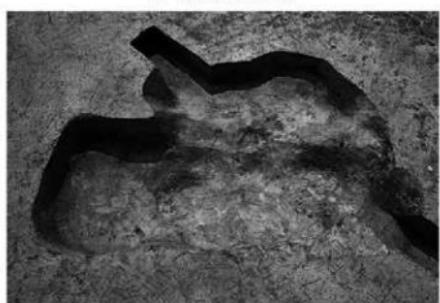
28 SX22 セクション（南から）



29 SX22 完掘（南から）



30 SX23 セクション（北西から）



31 SX23 完掘（北西から）



32 西区西側：作業風景（西から）



33 SX24 セクション（西から）



34 SX24 完掘（西から）



35 SX27 セクション（東から）



36 SX27 完掘（北から）



37 SX28 セクション（南から）



38 SX28 完掘（北から）



39 SX29 セクション（南から）



40 SX29 完掘（南から）



41 SX30 セクション（南から）



42 SX30 完掘（北から）



43 SX31-33 完掘（東から）



44 SX32 セクション（北から）



45 SX32 完掘（北から）



46 P5 セクション（南から）



47 P25 セクション（東から）



48 西区西側完掘（東から）



49 東区26Fグリッド：試掘トレンチセクション（北から）



50 東区Bトレンチ（東から）



51 東区Dトレンチ（南から）



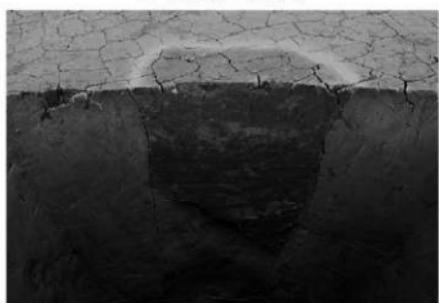
52 SD111セクション（西から）



53 SD111完掘（北西から）



54 SD110下駄出土状況（西から）

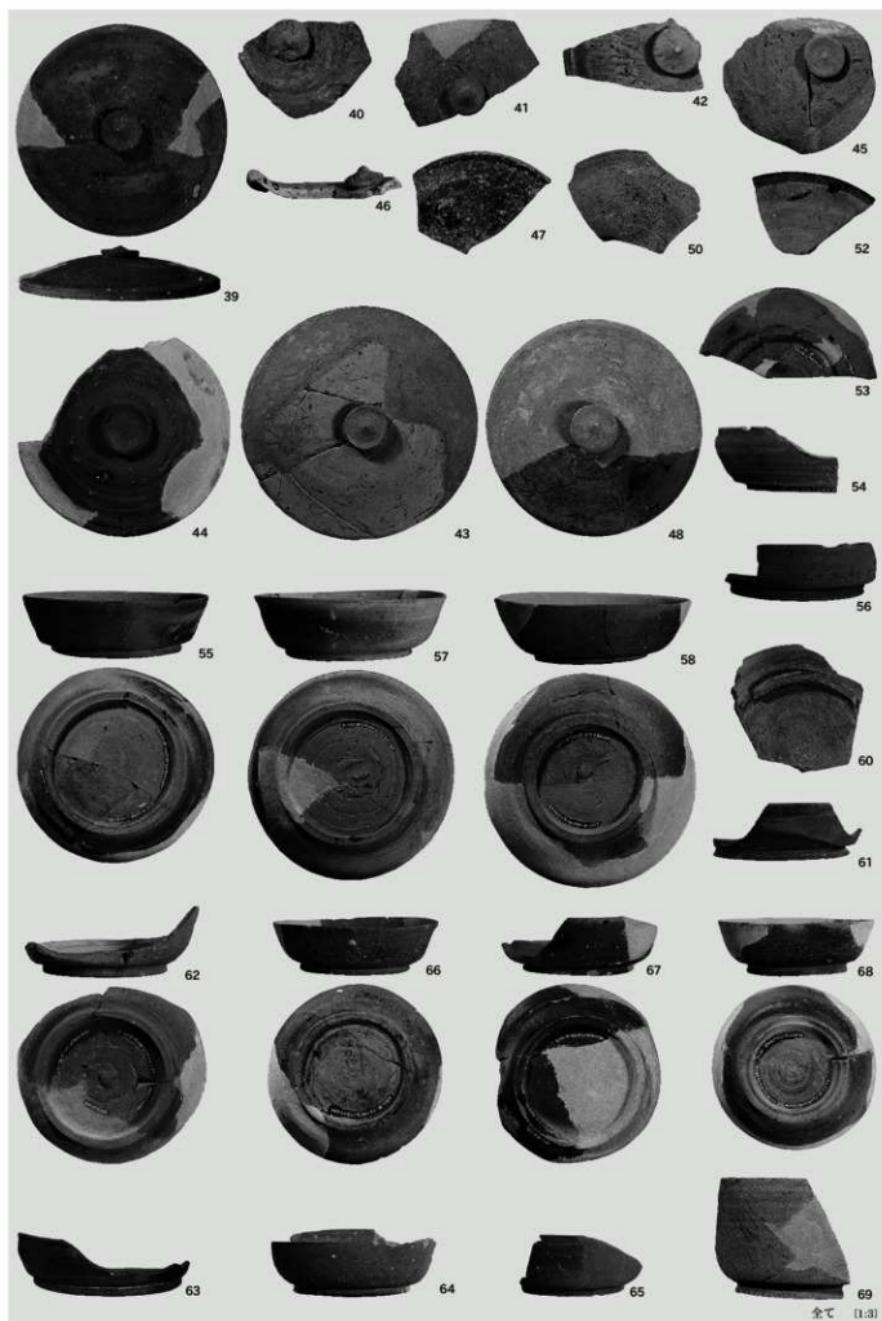


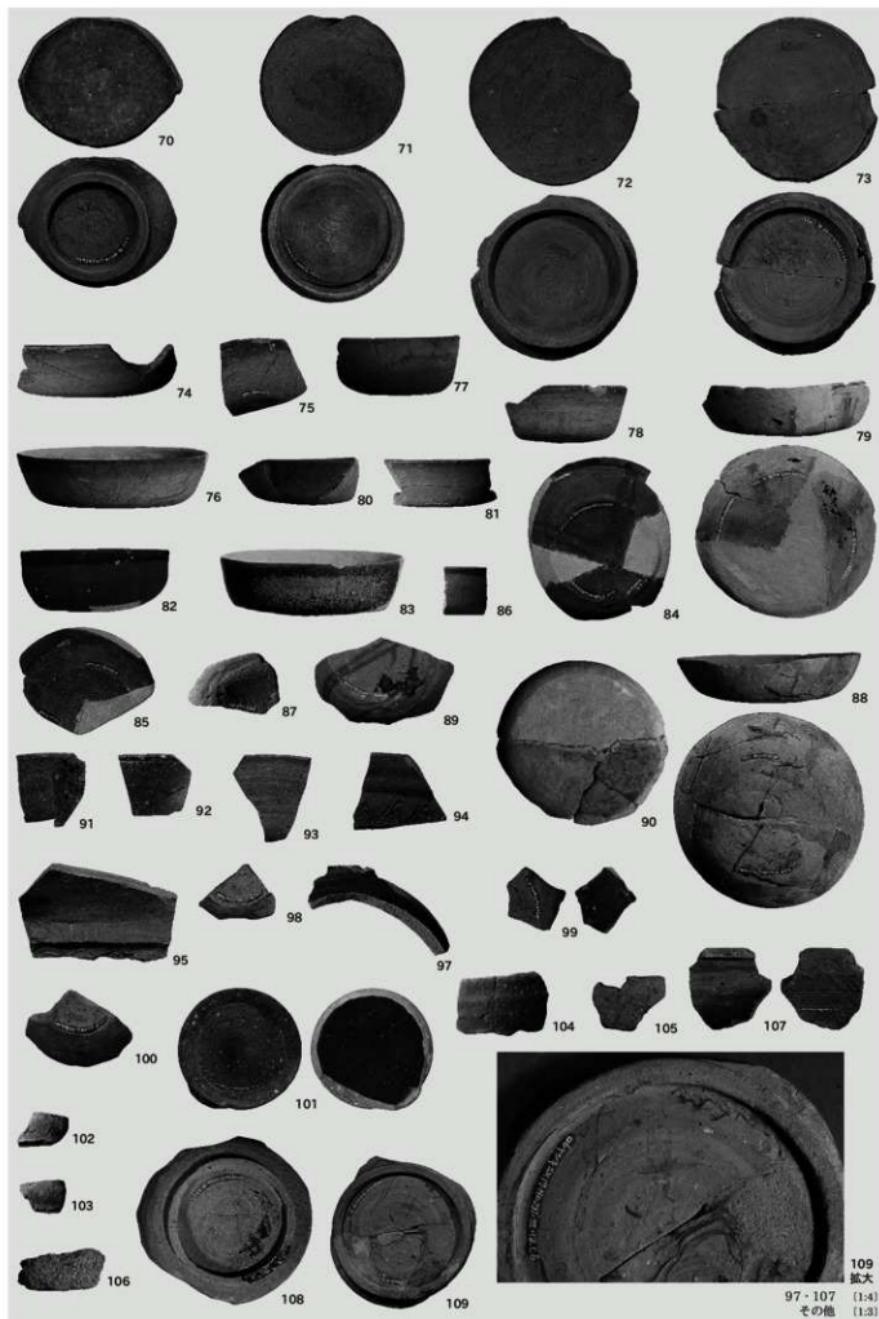
55 SE110セクション（西から）

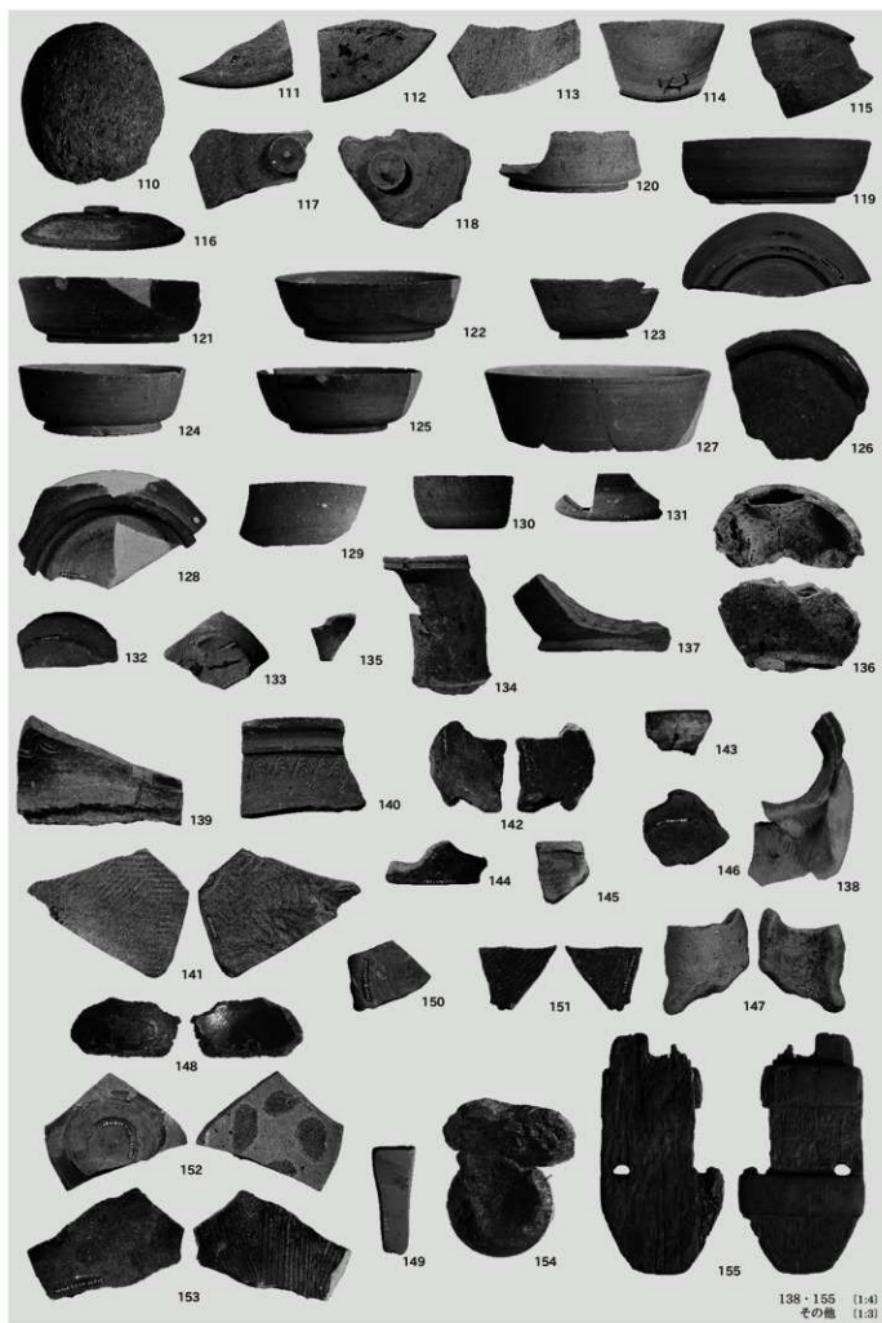


56 SE110完掘（西から）









## 報告書抄録

ふりがな	やしきわりつけいせき							
書名	屋敷削付遺跡							
副書名	一般国道253号上越三和道路関係発掘調査報告書							
巻次	V							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第185集							
編著者名	渡邊裕之・入江清次(埋文事業団)、ト部厚志(新潟大学災害復興科学センター)、株式会社パリノ・サーヴェイ							
編集機関	財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1 TEL 0250(25)3981							
発行年月日	西暦2008(平成20)年3月31日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 道路番号	北緯 ° ° °	東經 ° ° °	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因	
屋敷削付遺跡 <small>(新潟県上越市大学 戸野古新田字 屋敷削付)</small>	新潟県上越市大学 戸野古新田字 屋敷削付	15222	1476	37度 07分 46秒	138度 16分 20秒	20060424 ~ 20060731	12,630	一般国道253 号上越三和道 路
所取遺跡名	種別	時期	主な遺構		主な遺物	特記事項		
屋敷削付遺跡	遺物包含地	縄文時代後期			土器、四石			
	遺物包含地	平安時代	人為的理土坑、土坑 ピット、溝、遺物集中地点 自然流路		須恵器 土師器	自然流路の両岸から、人 為的に埋め戻された土坑 13基が検出され、一部 では円形に列配される。 ほかの遺構がほとんど検 出されなかつたことか ら、居住や生産とは異なる 性格の場であったと考 えられる。		
	遺物包含地	近世(17世 紀前半)	井戸			土器、砥石、 漆器椀、下駄		

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第185集  
一般国道253号上越三和道路関係発掘調査報告書 V  
屋敷削付遺跡

平成20年3月28日印刷 平成20年3月31日発行 編集・発行 新潟県教育委員会  
 〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1  
 電話 025(285)5511  
 財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団  
 〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1  
 電話 0250(25)3981  
 FAX 0250(25)3986  
 印刷・製本 北越印刷株式会社  
 〒950-0034 長岡市福住1丁目6番地27号  
 電話 0258(33)0306

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第185集『屋敷割付遺跡』 正誤表

頁	行	誤	正
40	上から8行	屋敷割付遺跡の北西500mの…	屋敷割付遺跡の北西400mの…
40	上から15行	(上越市教委1993・1999など)	(上越市教委1981・1993など)
42	上から1行	かし、越前遺跡と…	しかし、越前遺跡と…